

中畠遺跡発掘調査概要

—府営農地還元資源利活用事業「櫻田地区」の調査—

2004年3月

大阪府教育委員会

はじめに

中畑遺跡は、高槻市大字中畑に所在し、大阪府の東北端部の大坂府では極めて希少な山と縁に囲まれた北摂山地に存在する小盆地に立地しています。

今同の中畑遺跡の発掘調査は、府営農地還元資源利活用事業「櫻田地区」に先立って、平成15年度に実施したものであります。当該遺跡については、平成14年度に遺跡確認調査を行い、遺跡が存在することが新たに確認され、その結果に基づき発掘調査を実施したものです。

中畑を含めた周辺の田能、二科、杉生、出灰などのいくつかの山間小盆地によって構成された集落には、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歴史的文献が数多く残存しています。このことから、これらの時代の研究をする上において重要な地位を占め、歴史的にみても著名な地域であります。

しかし、埋蔵文化財については、以前に田能盆地において、高槻市教育委員会によって遺跡分布調査が行われ、田能北遺跡、田能南遺跡が発見された以外には、実態が不明な地域であります。しかし、これまで当該事業による過去4年間の発掘調査によって徐々にではありますが、田能地区については、遺跡の状況が明らかになってきています。中畑遺跡は、前年までの調査を実施した田能盆地の東側に所在する小盆地に立地する遺跡で、今回の調査の結果、後期旧石器時代、縄文時代早期の石器を発見し、これらの時代にも人々がこの周辺で生活していたことが明らかになりました。また、鎌倉時代には屋敷跡と推定される建物群など多数を発見し、多大な成果を挙げることができました。

これらの調査成果は、この周辺地域の歴史を考える上で、また北摂山地の開発の状況を知るうえで貴重な資料を提供したものといえます。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力いただきました高槻市教育委員会、北部農と緑の総合事務所、櫻田地区土地改良区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政について変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成16年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 向井 正博

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、農地還元資源利活用事業「櫻田地区」に先立って実施した高槻市大字中畑所在中畑遺跡の発掘調査概要である。
2. 現地調査は、文化財保護課調査第一グループ技師奥和之が担当し、それに伴う整理作業は、調査管理グループ技師林日佐子、小浜成が平行して行い、平成16年3月に全ての作業を終了した。
3. 調査に要した経費は、農林水産省および文部科学省の補助金を得て、大阪府環境農林水産部および大阪府教育委員会が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、高槻市教育委員会、大阪府環境農林水産部、大阪府北部農と緑の総合事務所、櫻田地区土地改良区、森田克行、橋本久和（高槻市教育委員会）をはじめとする諸機関、諸氏の方々の協力を得た。
5. 本書の写真測量は、第1次調査を株式会社八州、第2次調査を株式会社シー・エム・シーに委託した。なお、撮影フィルムについては、株式会社八州、株式会社シー・エム・シーにおいて個々に保管している。また、出土した樹木の樹種鑑定等については、財団法人元興寺文化財研究所、遺物の写真撮影については、有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 本書の編集、執筆は、奥が担当した。
7. 本概要是300部作成し、一部あたりの単価は1,659円である。

凡　　例

1. 座標については世界測地系平面直角座標（第VI系）、方位については座標北、標高については東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
2. 土色の色調については、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帳」日本色彩研究所 1992を使用した。
3. 遺構番号については、基本的に調査区毎に個々の遺構について1から順番に番号を付けた。また、複数の遺構でひとつの遺構を形成するものについては、「建物1-2」のように先に遺構名を明記し、調査区名、番号を付けた。
5. 遺物については、挿図、図版の番号と一致させた。

目 次

はじめに

例言

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 調査の成果	3
第1節 概要	3
第2節 1・3区の調査	3
第3節 2区の調査	8
第4節 4・6区の調査	9
第5節 5区の調査	10
第6節 7区の調査	12
第7節 8区の調査	20
第8節 9・10区の調査	32
第3章 まとめ	35
抄録	38

挿 図 目 次

第1図 大阪府と調査地点	1	第17図 5区基本層序図	10
第2図 中堀遺跡調査区位置図	2	第18図 5区平面図	10
第3図 1・3区基本層序図	3	第19図 建物5-1平面・断面図	11
第4図 1・3区平面図	4	第20図 5区出土遺物1	11
第5図 建物3-1・構造3-1平面・断面図	5	第21図 5区出土遺物2	11
第6図 道状構造1土層断面図	5	第22図 7区平面図	12
第7図 上坑1-2平面図	6	第23図 7区基本層序図	12
第8図 土坑1-2細部平面・断面図	6	第24図 7区遺構密集地区平面図	13
第9図 1区出土遺物	7	第25図 建物7-1平面・断面図	14
第10図 1・3区出土遺物	7	第26図 建物7-1出土遺物	14
第11図 2区平面図	8	第27図 建物7-2平面・断面図	15
第12図 2区基本層序図	8	第28図 建物7-2柱根検出状況図	15
第13図 4区平面図	9	第29図 SP18柱根検出状況図	16
第14図 4区基本層序図	9	第30図 構造7-1平面・断面図	16
第15図 6区基本層序図	9	第31図 7区遺構内出土遺物	16
第16図 6区平面図	9	第32図 7区遺構外出土遺物1	18

第33図	7区遺構外出土遺物	2	19
第34図	8区基本層序図	20
第35図	8区平面図	21
第36図	8区遺構密集地区平面図	22
第37図	建物8-1出土遺物	23
第38図	建物8-1柱根検出状況図	23
第39図	建物8-1平面・断面図	23
第40図	建物8-2平面・断面図	24
第41図	建物8-2柱根検出状況図	25
第42図	建物8-2・横列8-1出土遺物	25
第43図	建物8-3柱根検出状況図	26
第44図	建物8-3平面・断面図	26
第45図	建物8-3出土遺物	26
第46図	横列8-1平面・断面図	27
第47図	横列8-2平面・断面図	27
第48図	8区柱穴内出土遺物	28
第49図	8区柱根検出状況図	28
第50図	8区遺構内出土遺物	29
第51図	8区遺構外出土遺物	30
第52図	9・10区基本層序図	32
第53図	9・10区平面図	33
第54図	9・10区遺構外出土遺物	34
第55図	10区出土遺物	34
第56図	7~10区遺構平面図	36

図版目次

図版表紙	4. 建物3-1 SP12断面
中畠地区全景（西上空より）	5. 建物3-1 SP29断面
図版1	6. 建物3-1 SP18断面
1. 調査地区全景（南上空より）	7. 建物3-1 SP20断面
2. 1区全景（南より）	8. 建物3-1 SP22断面
3. 1区基本断面1	9. 横列3-1 SP26断面
4. 1区基本断面2	図版5
図版2	1. 4区全景（北より）
1. 3区全景（東より）	2. 6区全景（北より）
2. 3区全景（南より）	3. 4区基本断面（南より）
3. 3区基本断面	4. 6区基本断面（北より）
図版3	図版6
1. 土坑1-2（南より）	1. 5区全景（東より）
2. 土坑1-2断面（北より）	2. 建物5-1（東より）
3. 道状遺構1断面1	3. 建物5-1 SP9断面
4. 道状遺構1断面2	4. 建物5-1 SP7断面
5. 2区基本断面（西より）	5. 建物5-1 SP4断面
6. 2区全景（東より）	6. 建物5-1 SP6断面
図版4	図版7
1. 建物3-1・横列3-1（南より）	1. 7区全景（東より）
2. 建物3-1 SP17断面	2. 7区遺構密集地区（南より）
3. 建物3-1 SP16断面	3. 7区基本断面（西より）

4. 建物 7 - 1 SP10断面
 5. 建物 7 - 1 SP12断面
 6. 建物 7 - 1 SP16断面
- 図版 8
1. 建物 7 - 1 SP8断面
 2. 建物 7 - 1 SP20断面
 3. 建物 7 - 1 SP7断面
 4. 建物 7 - 1 SP26断面
 5. 建物 7 - 1 SP25断面
 6. 建物 7 - 1 SP23断面
 7. 建物 7 - 2 SP46断面
 8. 建物 7 - 2 SP45断面
 9. 建物 7 - 2 SP39断面
 10. 建物 7 - 2 SP49断面
 11. 建物 7 - 2 SP48断面
 12. SP18柱根検出状況
- 図版 9
1. 8区全景（西より）
 2. 8区遺構密集地区（西より）
 3. 8区遺構密集地区（南より）
- 図版10
1. 8区基本断面1（西より）
 2. 8区基本断面2（東より）
 3. 建物 8 - 1 SP5断面
 4. 建物 8 - 1 SP5柱根検出状況
 5. 建物 8 - 1 SP11断面
 6. 建物 8 - 1 SP11柱根検出状況
 7. 建物 8 - 1 SP4断面
 8. 建物 8 - 1 SP25断面
 9. 建物 8 - 1 SP115断面
 10. 建物 8 - 1 SP109断面
 11. 建物 8 - 1 SP20断面
 12. 建物 8 - 1 SP23断面
- 図版11
1. 建物 8 - 2 SP104断面
 2. 建物 8 - 2 SP104柱根検出状況
3. 建物 8 - 2 SP6断面
 4. 建物 8 - 2 SP14断面
 5. 建物 8 - 2 SP21断面
 6. 建物 8 - 2 SP7断面
7. 建物 8 - 2 SP131断面
 8. 建物 8 - 2 SP8断面
9. 建物 8 - 3 SP45柱根検出状況
 10. 建物 8 - 3 SP10断面
 11. 建物 8 - 3 SP103断面
 12. 建物 8 - 3 SP148断面
- 図版12
1. SP55断面
 2. SP55柱根検出状況
 3. SP6柱根検出状況
 4. SP11柱根検出状況
 5. SP14柱根検出状況
 6. SP21柱根検出状況
 7. SP29柱根検出状況
 8. SP73柱根検出状況
 9. SP92柱根検出状況
 10. SP106柱根検出状況
- 図版13
1. 9区全景（南東より）
 2. 9区全景（東より）
 3. 9区基本断面1
 4. 9区基本断面2
- 図版14 出土遺物 1
- No. 13, 15, 19, 23, 41, 43, 49, 50, 61, 63
- 図版15 出土遺物 2
- 上 No. 56, 77, 89 下 1・3・5区
- 図版16 出土遺物 3
1. 7区 2. 8区 - 1
- 図版17 出土遺物 4
1. 8区 - 2 2. 9区
- 図版18 出土遺物 5
- 石器 (No. 1, 12, 37~40, 109)

第1章 調査の経緯と経過

今回の調査を実施した中畠遺跡は、行政区画で言えば、高槻市大字中畠に所在する。中畠地区は、周辺に存在する田能、出灰、二料、杉生などの地区を加えて櫻田と呼ばれている。その櫻田地区（第1図）は、高槻市の北部、市街区域から約12km離れた大阪府の北東部、北摂山地の穂やかな山々に囲まれた標高350m前後を測る小規模ないくつかの山間盆地により成り立ち、北と西を龜岡市、東を京都市と接しており、大阪府の形状からいえば、北に瘤状に飛び出した形をなしている。その中でも中畠地区は、最も東北側に位置している。

今回の発掘調査の経緯となった大阪府営農地還元資源利活用事業（櫻田地区）は、山間盆地の比較的傾斜のきつく狭小不整形で統一性のない耕地を、府内の公共事業などによって生じた残土を利用し埋め立て、広い水田に整備し、農作業の効率化を図ろうとする事業である。

これに伴う発掘調査および遺跡確認調査は、本府環境農林水産部と本府教育委員会が協議を行い本府教育委員会によって実施している。地区内の調査は、平成11年度に実施した田能地区内の遺跡確認調査を皮切りに、4年間継続して実施し、平成11年度に神宮寺西遺跡、田能城跡。平成12年度に、田能北遺跡（A地区）、田能南遺跡。平成13年度に田能北遺跡（B～I地区）。平成14年度に、田能北遺跡（K～Q地区）、中畠地区的遺跡確認調査などの調査を行い、数々の調査成果を得ている。

今回の中畠遺跡の発掘調査は、平成15年6月30日に開始し、平成16年2月26日をもって終了した。調査面積は、4,881m²を測る。

調査の方法は、基本的に厚さ0.3mの耕作土層、床土層および盛土層をバックホウによって除去した。その後人力により、厚さ0.2mから0.3mの遺物包含層を地山まで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

なお、周辺の位置と環境については、「田能遺跡群発掘調査概要・II」を参照されたい。
註>

- 1) 大阪府教育委員会「田能地区遺跡確認調査概要」 2000
- 2) 大阪府教育委員会「田能遺跡群発掘調査概要・II」 2001
- 3) 大阪府教育委員会「田能遺跡群発掘調査概要・III」 2002
- 4) 大阪府教育委員会「田能遺跡群発掘調査概要・IV」 2003



第1図 大阪府と調査地点



第2図 中烟遺跡調査区位置図

第2章 調査の成果

第1節 概要

中畠遺跡は、当該事業に伴い平成14年度の遺跡確認調査によって新たに発見された遺跡で、基本的に中畠盆地全域（図版表紙）に広がり、東西長約120m、南北幅約300mを測る。

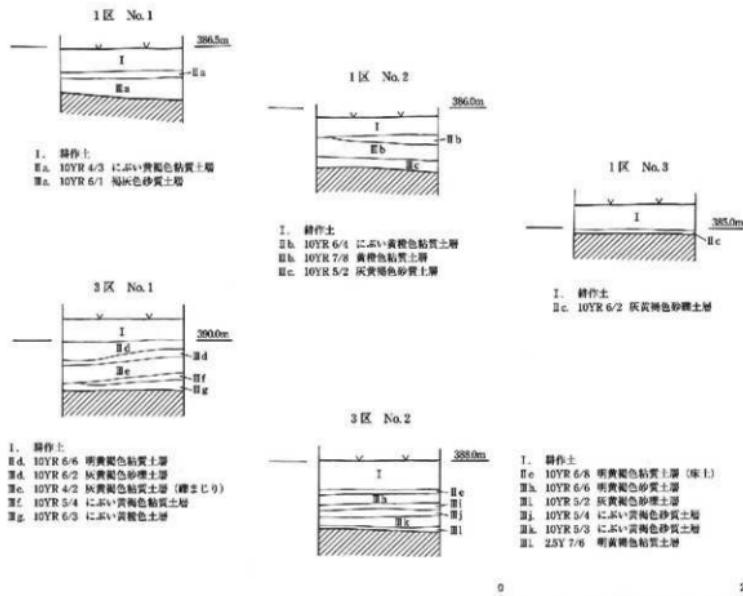
今年度の発掘調査地区は、中畠地区の西側を中心として実施した。調査区域（第2図、図版1-1）は、大きく分けて中畠北地区、中畠西地区および中畠南地区の一部の3箇所に分散している。調査区域は、当該事業に伴って遺構が削平される地区に限定して行ったため、10調査区にもおよぶ。

調査によって検出した遺構は、建物5棟、土坑2基、柱穴、道状遺構1本などである。

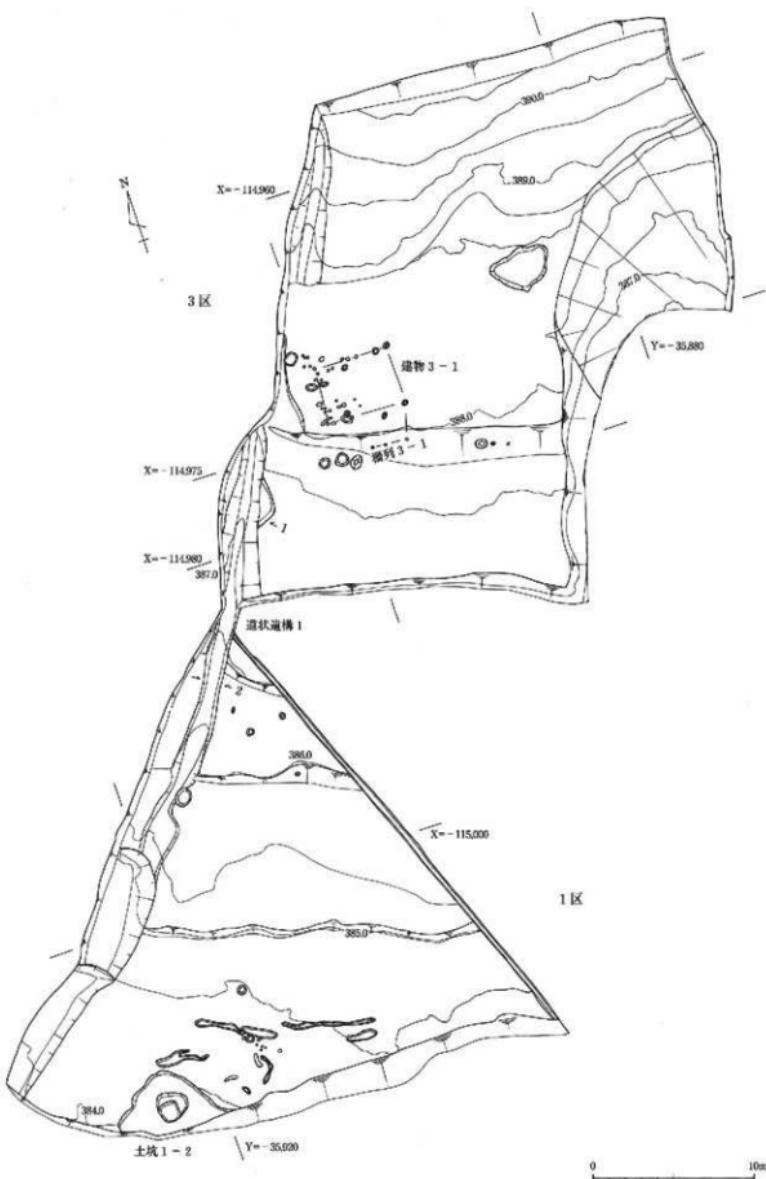
第2節 1・3区の調査

1. 概要（第4図）

3区は、圃場整備対象地域内の中で、最も北の奥まった地域に位置する。北の山塊から南西方に向に狹少な谷へと下る標高約384.0mから390.5mの丘陵斜面上を中心とする。1区（図版1-2）は、平面形では三角形に近い形、3区（図版2-1・2）は、長方形に近い形を呈している。



第3図 1・3区基本層序図



第4図 1・3区平面図

これらの調査区の位置関係は、下方に1区、上方に3区が存在し、調査区西辺のほか中央付近で一部が接している。

これらの調査区の下方、同一丘陵上に約2m離れて2区が存在する。

検出した遺構は、建物1棟、土坑1基、道状遺構1本などである。

2. 基本層序（第3図、図版1-3・4、2-3）

基本層序は、各地区とも同様な堆積状況を呈していたが、丘陵斜面が水田造成時に堆積土および地山相当層が削平を受け、地点によっては同一層が存在しない箇所もある。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層

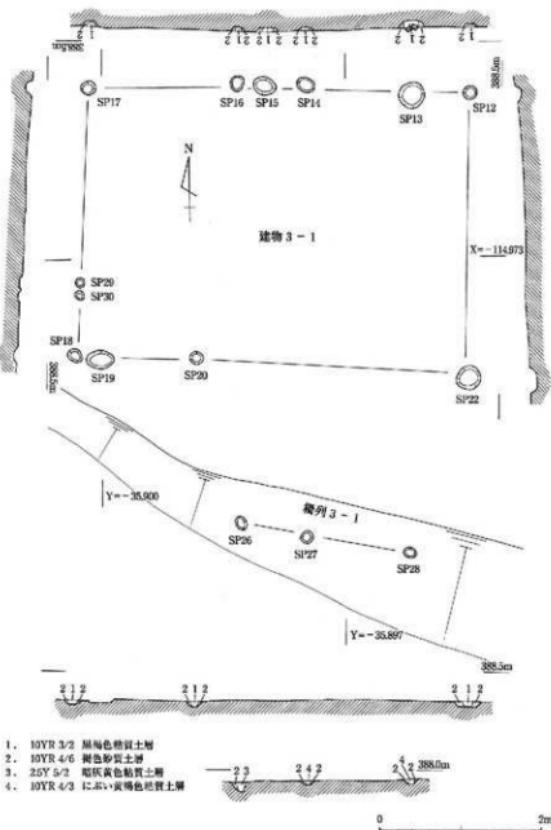
厚は、0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床土で、基本的に1層であ

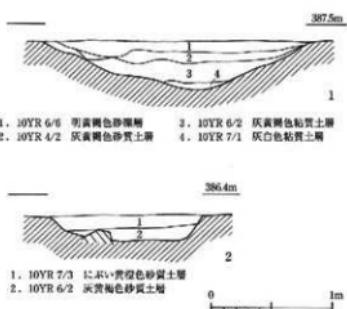
るが、地点によっては2から3層に分かれる箇所もある。層厚は0.1m前後を測る。

III層 褐灰色および灰黃褐色の粘質土ないし

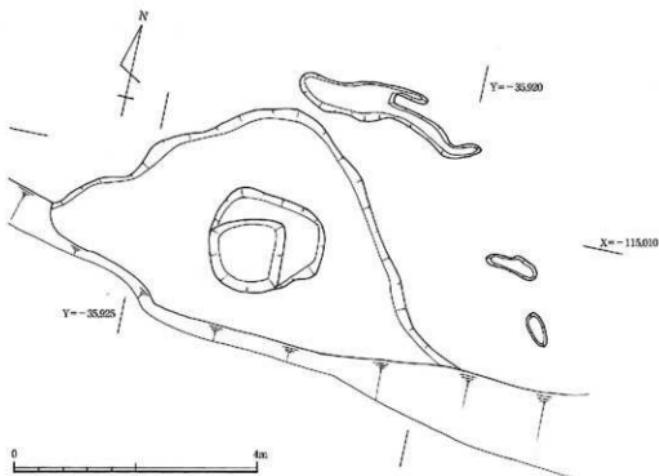
は、砂質土を基本とする層である。基本的に中世の遺物を若干含んでいるが、若干縄文時代の石器、近世の遺物を極少量含む。層の堆積状況、色調、土質からみて、近世の時点において中世以前に堆積した遺物包



第5図 建物3-1・柵列3-1平面・断面図



第6図 道状遺構1土層断面図



第7図 土坑1-2平面図

含層である層を耕作に利用するため、攪拌を受けた層と推定される。部分的に2から4層に分けることが出来る。層厚0.1m前後を測る。

3. 調査の成果

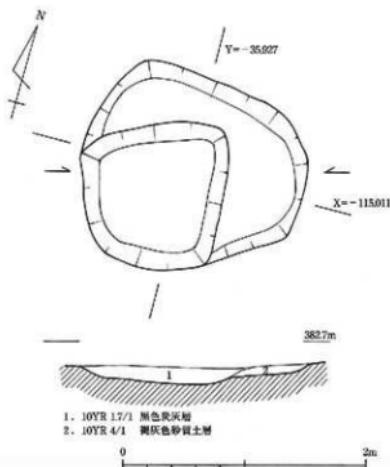
建物3-1（第5図、図版4-1～8）

3区の中央西側よりのX=-114.973、Y=-35.897付近を中心には存在する。建物は、梁間1間（約3.4m前後）、桁行きの柱間は、南側の柱穴が1箇所欠失しているものと推定され長いが、基本的に3間（北側約4.7m、南側約4.8m）と推定される。柱間は、1.5mから2.7mを測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.3mから0.5mを測る。

柱穴の深さは、地山面が削平を受けていたものと推定され、0.05mから0.08mと浅い。

建物の時期は、柱穴内から遺物が出土しなかったため、確定できないが周辺の出土遺物から中世（13世紀前半）と推定される。

柵列3-1（第5図、図版4-1・9） 建物3-1の南側約2.1m付近のX=-114.973、



第8図 土坑1-2細部平面・断面図

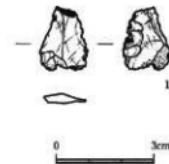
$Y = -35.897$ を中心として存在する。当初は、ほぼ同方向に延びることから建物3-1に付属する庇の一部と考えていたが、建物3-1の南側の桁行との距離が約2.1mと長く、また東側の梁が全く揃わないことから、柵列の可能性が高いものと判断した。柵列に伴う柱穴は、3個検出したが、西側の部分は、水田造成時に削平されていることから西方向に延びる可能性が高い。柱間は、0.8mから1.3mを測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.3mから0.5m、深さ0.05mから0.15mを測る。

土坑1-2（第7・8図、図版3-1・2） 1区の南端 $X = -115.011$ 、 $Y = -35.297$ 付近に存在する。土坑の外側は、土坑の東側と北側、0.5mから0.6m先には、検出面から約0.05m程度ほぼフラットに削平し、テラスを作り出している。このことから水田造成時に南側が削平を受け欠失しているため不明な点が多いが、土坑は2段に成形しており、上段は平面形では不定形な三角形に近い。最大幅約1.7m、最大長約1.9mを測る。下段は、平面形では隅丸方形に近く、一辺1.1m前後、テラス面からの深さ約0.15mを測る。土坑埋土は黒色炭灰層で、出土した炭の細片は形になるものは極めて少ない。土坑内部の壁面・底面は、赤褐色を呈する痕跡が部分的に見受けられたことから、火を使う施設と判断したが用途は不明である。また遺物は全く出土しなかったため、時期は不明である。

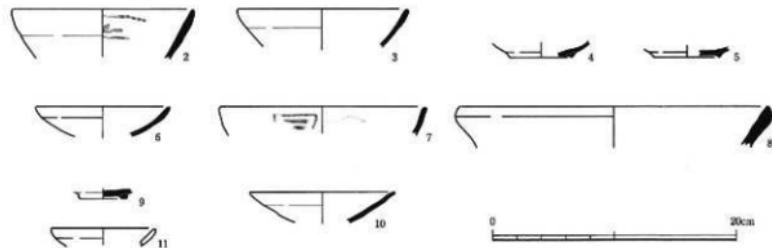
道状遺構1（第6図、図版1-2、2-2、3-3・4） 1・3区の西端を南西方向から南東に延びる溝状の遺構である。幅1.5m前後、深さ0.2mから0.4mを測る。西側の調査区外に同方向に延びる道が存在するため道である可能性が高い。遺物は全く出土しなかったが、溝内部の埋土が、近世に攪拌を受けたと推定している褐灰色砂質土層ないしはにぶい黄褐色粘質土層と酷似しているため中世以降のものと判断した。

4. 出土遺物

調査区内から出土した遺物（第9・10図、図版15-2～4・6～8・10・11、18-1）は少量で、縄文時代と推定されるサヌカイト剥片（1）を除くと、瓦器椀、土器器椀、土器器皿、青磁碗、須恵器擂鉢などで時期は13世紀前半を中心とする。



第9図 1区出土遺物



第10図 1・3区出土遺物（2～8 1区、9～11 3区）

第3節 2区の調査

1. 概要 (第11図、図版3-6)

2区は、圃場整備対象地域の中でも最も北の奥まった地域に位置する。北の山塊から南西方向に狹少な谷へと下る標高約383.0mから383.5mの丘陵斜面上を中心とし、東側約2mの同一丘陵上には1区が存在する。2区は、平面形では三角形に近い形を呈している。

検出した遺構は、石の抜き取り跡、木の根の痕跡などで顕著な遺構は、全く検出しなかった。遺物は、1区からの流れ込みと推定される瓦器碗、土師器小皿の小片が極少量出土したが、図化できるものはなかった。

2. 基本層序 (第12図、図版3-5)

基本層序は、丘陵斜面が水田造成時に堆積土および地山相当層が削平を受け、地点によっては同一層が存在しない箇所もある。

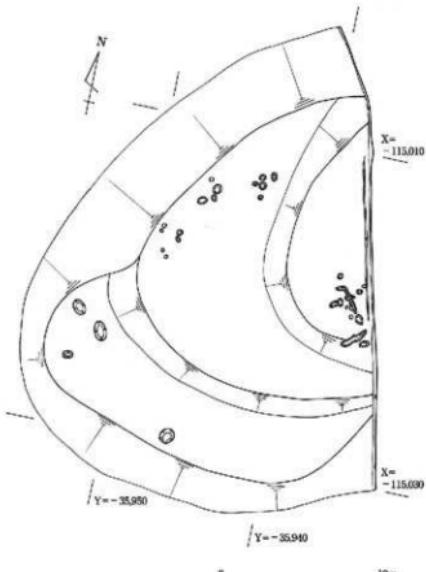
以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

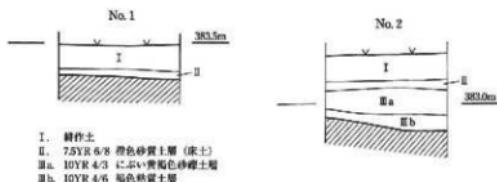
II層 現耕作土層の床土で、基本的には1層であるが、部分的に2から3層に分けることが出来る。層厚は、0.05mから0.1mを測る。

III層 にぶい黄褐色砂礫土および褐色粘質土を基本とする。しかし一部には、水田造成時に削平を受け、一部のみ残存していた箇所もある。層中に中世の遺物、近世の遺物を極少量含む。層の堆積状況、色調、土質からみて、近世の時点において中世以前に堆積

した層を耕作に利用するため、攪拌を受けたものと推定される。部分的に2層に分けることが出来る。層厚0.1mから0.3mを測る。



第11図 2区平面図



第12図 2区基本層序図

第4節 4・6区の調査

1. 概要 (第13・16図、図版5-1・2)

4・6区は、今回の調査地区の中では最も西に位置する調査区で、東の山塊から西へ下る丘陵縁辺部端付近に位置する。これら調査区の北側には、北の山塊から南西方向に延びる狹少な谷が存在し、その北東上方の丘陵上には、1区から3区が位置する。また、同一丘陵上南東側約50m先の上方には、7区が存在する。調査区の位置関係は、4区が上段に存在し、標高369m前後を測る。約20m西方の下段には6区が存在し、標高366m前後を測る。両調査区とも遺跡の端部に当っているものと推定され、検出した遺構は、石の抜き取り跡と推定される小穴、木の根の痕跡などで、顕著な遺構は、全く検出しなかった。遺物は、同一丘陵上部に存在する遺構からの流れ込みと推定される瓦器椀、土師器小皿、青磁碗などが少量出土したが、図化できるものはなかった。

2. 基本層序 (第14・15図、図版5-3・4)

各調査区共、谷部と丘陵縁辺部の境目に立地しているため、床土層以下は、若干異なる色調、土質を呈しているが、堆積状況はほぼ同様な状況を示している。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 4区には認められない層で、現耕作土層の床土である。層厚は、0.05m前後を測る。

III層 灰黄褐色土および浅黄色粘質土を基本とし、層が攪拌を受けている状況を呈していたことから旧耕作土と推定される。中世および近世の遺物を若干含んでいる。層厚0.1mから0.2mを測る。

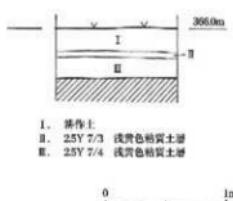
IV層 明黄褐色砂質土を基本とする層

で、周辺の地形、

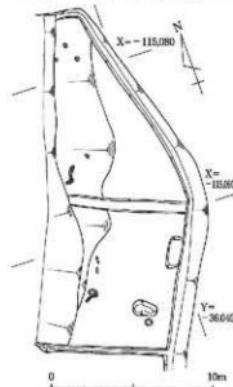
土砂の堆積状況か

ら谷の堆積推層の

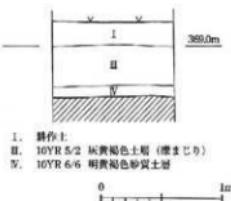
一部と定される。



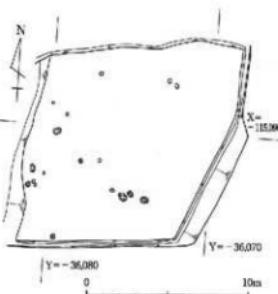
第15図 6区基本層序図



第13図 4区平面図



第14図 4区基本層序図



第16図 6区平面図

第5節 5区の調査

1. 調査の概要 (第18図、図版6-1)

5区は、中畠地区の南西側、南の山塊から北に下る丘陵縁辺部を中心とする地区で、平成14度の遺跡確認調査において中畠南地区で確認した地区の中では最も西側にあたる。調査地区的標高は、329m前後を測る。調査地区は上段と下段とに分かれ、遺構は上段のみ確認された。下段は、水田耕作時に削平を受けたものと推定され、全く検出されなかった。

検出した遺構は、建物1棟、土坑2基、柱穴多数、溝などである。

2. 基本層序 (第17図)

下段については、水田耕作時に削平を受け、耕作土以下の層は存在しない。ここでは、削平を受けた可能性が高いものの、比較的土層が残存していた上段についてのみ記述する。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、

0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床土で層

厚は、0.1m前後を測る。

III層 にぶい黄褐色粘質土を

基本とする層で、5区の
遺物包含層である。層厚

は、0.05m前後を測る。

3. 調査の成果

建物5-1 (第19図、図版6-2~6) 5区中央西側より
のX=-115,330、Y=-36,965付近を中心として存在する。梁間1間 (東側約3.2m、西側約2.5m)、
桁行き2間 (北側約4.7m、南側



- I. 耕作土
- II. 10YR 6/3 にぶい黄褐色粘質土層
- III. 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質土層

0 1m

第17図 5区基本層序図



第18図 5区平面図

約4.3m)の建物で、柱間は、2.0mから2.8mを測る。柱穴は平面形では円形に近く、径0.17mから0.45mを測る。柱穴の深さは、地山面が削平を受けており、0.06mから0.2mと浅い。

建物からは、SP 8より土師器小皿片、石器が出土している。建物の時期は、柱穴内の遺物から13世紀前半と推定される。

4. 出土遺物 (第20・21図、

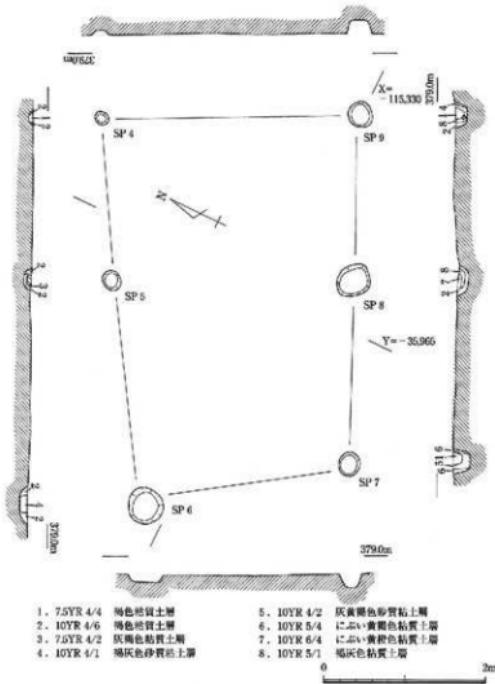
図版14-13・15、15-14・16・

17、18-12)

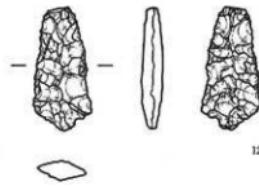
調査区内から出土した遺物は、瓦器碗、土師器皿、石器などで量的には少ない。

土器 13は、土坑5-11から出土した瓦器碗で、高台部は欠損し、口縁部から底部にかけて丸みを持ち深く、口縁端部内面に段を有する。今回の調査で出土した中世の遺物の中では、最も古い要素を持つもののひとつである。15は、造構外から出土した瓦器碗で、5区のほとんどの造構の時期と推定される。高台は三角形に近いが短い。底部から口縁部に向かって外側に丸みを持ちながら伸びる。端部は丸く治める。

石器 12は小型の有舌尖頭器。サヌカイト製であろう。先端部を欠失している。現存長37.5mm、最大幅17.8mm、最大厚6.0mm。全体にローリングを受けている。先端の欠失部も新しいものではない。側縁には斜行する深い細部調整が認められる。茎は三角形のタイプで、突出度は小さい。縄文時代草創期から早期。



第19図 建物5-1平面・断面図



第20図 5区出土遺物1 (SP 8)



第21図 5区出土遺物2 (13 土坑5-11、14 建物5-1 SP 8、15~17 道構外)

第6節 7区の調査

1. 概要 (第22図、図版7-1)

7区は、中畠地区の西側、北東の山塊から西に下る標高375mから377mを測る丘陵縁辺部付近に存在する。調査区西側は、周辺の地形から西端付近から急激に谷方向に向かって下るものと推定される。

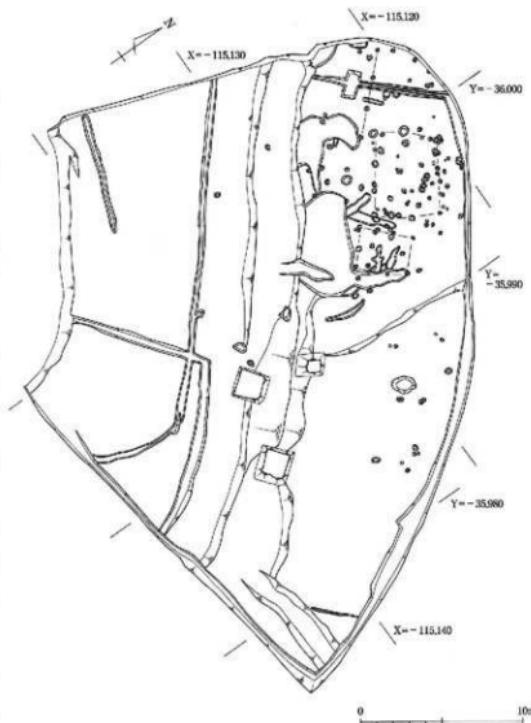
調査区は、近世と推定される水田造成によって上下2段に分かれ、高低差は約2mを測る。

7区で検出した遺構は、調査区上段の北西側、東西約15m、南北約10mの狭い範囲に密集(第24図、図版7-2)し、残りの箇所には顕著な遺構は検出されなかった。

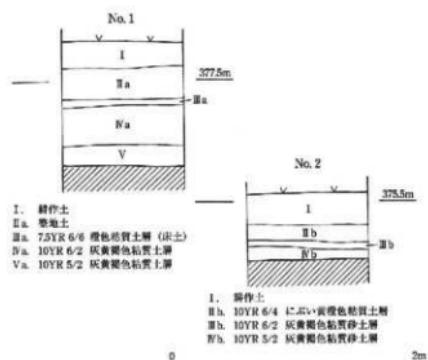
遺構が密集した地区で検出した遺構は、建物2棟、欄列1本、土坑2基、柱穴多数、溝などである。

2. 基本層序 (第23図、図版7-3)

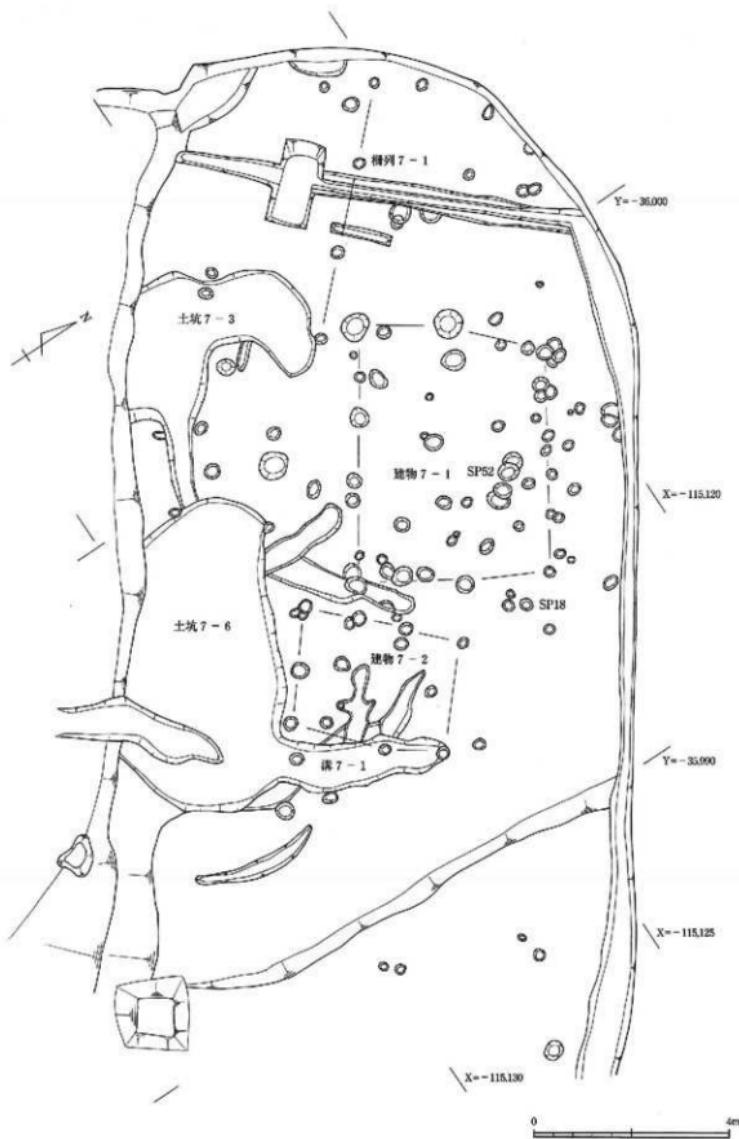
調査地区は、水田造成によって基本的に上段と下段に分かれているが、削平を受けなかった地区的層序は、ほぼ同様な堆積状況を示している。また、1区上段においては、近代と推定される時期に、盛土を行い複数の柵田の一部を整地して1枚の水田とした箇所が、平面および断



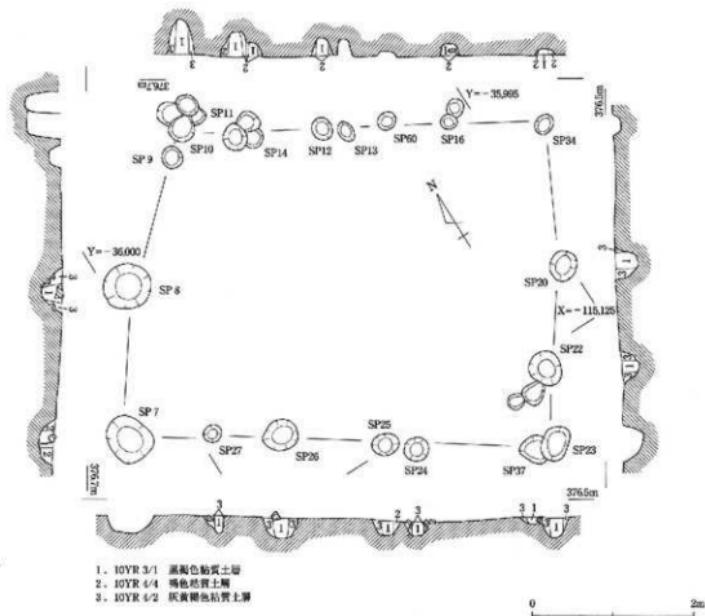
第22図 7区平面図



第23図 7区基本層序図



第24図 7区造構密集地区平面図



第25図 建物7-1平面・断面図

面で確認されている。

以下、各層の概要を記述する。

I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床土である。層厚は、0.1m前後を測る。

III層 近世と推定される耕作土の床土である。層厚は、0.1m前後を測る。

IV層 灰黄褐色ないしはにぶい黄褐色粘質土を基本とする層である。層が攪拌を受けている状況を呈していたことから旧耕作土と推定される。中世および近世の遺物を多く含む。層厚0.1mから0.2mを測る。

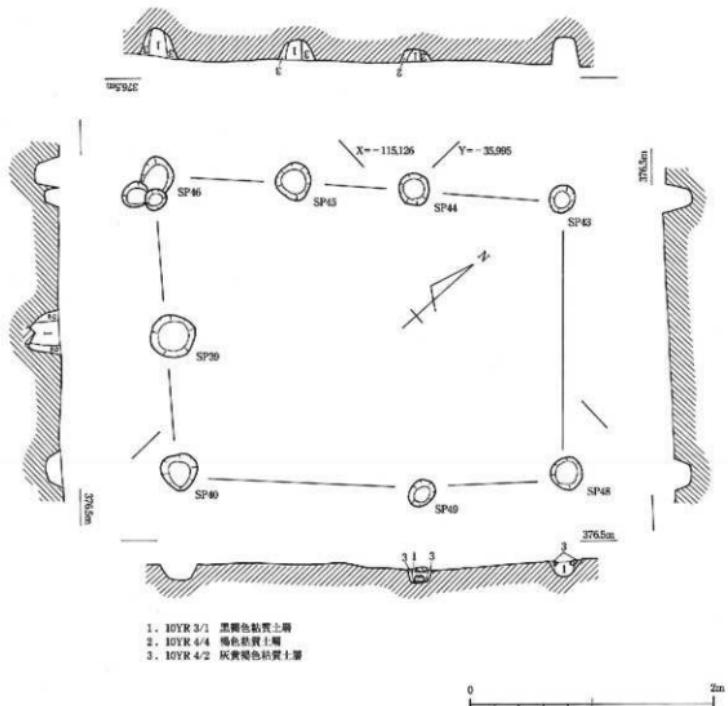
V層 本調査区の遺物包含層である。灰黄褐色粘質土層を基本とする。基本断面位置が比較的良好な地点であるため、層厚が0.1mから0.2mと比較的厚いが、地点によっては、削平を受け存在しない地点もある。中世の遺物を含む。

3. 調査の成果

7区遺構密集地区（第24図、図版7-2） 7区の北西側、東西約15m、南北約10mの狭い範囲内に検出された遺構群である。他の地区については、遺物は出土するものの顕著な遺構は検出されなかった。



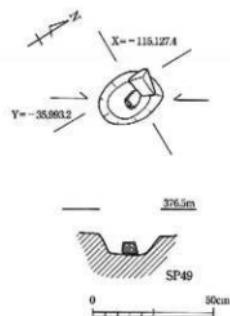
第26図 建物7-1出土遺物
(18 SP20, 19・20 SP8)



第27図 建物7-2平面・断面図

7区遺構密集地区は、建物2棟、柵列1本、土坑2基、溝1本、建物にならなかった柱穴多数などによって構成される。遺構の新旧は別として、遺構の配列状況から類推すると、北側については調査区分外であるため不明な点が多いが、建物7-1・2を中心に東側を溝7-1、南側を土坑である土坑7-3・6、西側については、周辺の地形から斜面によって区画されていたものと推定される。これらのことから屋敷地であった可能性が高い。

建物7-1（第25図、図版7-4～6、8-1～6） 7区遺構密集地区のほぼ中央部、X = -115.123、Y = -35.997付近を中心には存在する。梁間2間（約4.0m）、桁行き3間（北側約4.5m、南側約5.2m）の建物で、梁間の柱間は2m前後、桁行きの柱間は1.7m前後のものが多く占めるが、中には1.2mを測るものもある。建物の梁間のほぼ中央に存在する柱穴



第28図 建物7-2
柱根検出状況図

の位置が、梁間の軸線より若干外側に存在する。また、桁行きのはば同軸線上には、この建物には付随しないと考えられる何個かの柱穴が存在することから、建替えが行われた可能性が高い。

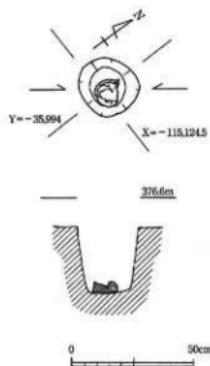
柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.45mを測る。柱穴の深さは、柱の長さが影響されている可能性があり、様々で深さ0.08mから0.2mを測る。

建物からは、SP20より瓦器碗（第26-18図）、SP 8より土師器小皿（第26-19・20図、図版14-19、16-20）が出土している。

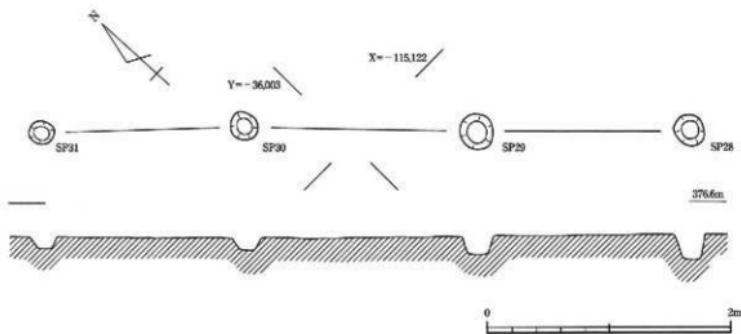
建物の時期は、柱穴内、遺物包含層からの遺物から13世紀前半のものと推定される。

建物7-2（第27図、図版8-7～11） 7区遺構密集地区の東側X=-115.126、Y=-35.995付近を中心に存在する。基本的に梁間2間（約4.0m）、桁行き2間（北側約4.5m、南側約5.2m）の建物と推定される。しかし北側の梁間中央、東側桁行きの南側の柱穴は、その周辺の遺構面を十分に精査したが全く検出されなかった。

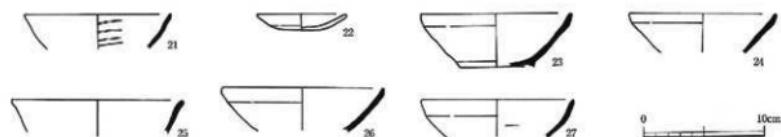
柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.45mを測る。柱穴の深さは、柱の長さが影響されている可能性があるものと推定され、様々で深さ0.08mから0.2mを測る。また、SP49より柱穴底部から柱根が検出された。柱の中心部付近が残存していたもの



第29図 SP18柱根
検出状況図



第30図 桐列7-1平面・断面図



第31図 7区遺構内出土遺物 (21・22 SP52, 23・24 漢7-1, 25~27 土坑7-6)

と推定され、形状は立方体に近い。長辺約0.15m、短辺約0.1m、高さ0.1m前後を測る。樹種鑑定の結果モミとされる。

遺物は、柱穴内から瓦器片、土師器片が極少量出土したが、図化できるものはなかった。

柵列7-1（第30図） 7区遺構密集地区の南西側X = -115.124、Y = -36,001からX = -115.120、Y = -36,005付近にかけて存在する。柵列の西側は調査区外になるため不明であるが、調査区の西端付近で急激に下ることから柵列は延びても1間であろう。検出したのは3間で、検出長約5.3m、柱間は1.65mから1.90m、深さ約0.16mを測る。土坑7-3の北端と柵列の東端柱穴SP28が接し、そこから柵列が西に延びる。建物7-1とは軸線が異なるが、位置関係から屋敷地と外側を区切る柵列であった可能性が高い。

柱穴（第24図） 建物や柵列の一部と考えられる柱穴以外にも、7区遺構密集地区において多数の柱穴を検出した。これらについて、調査中、調査後にすべて検証したが、なんらかの並びを示すものも中には認められたが、建物、柵列など、複数の遺構でひとつの遺構を形成するものはなかった。

それらの中には、SP18（第29図、図版8-12）のように柱根が検出されたもの。SP52（第31-21・22、図版16-21・22）のように図化できる遺物が出土したものもある。SP18は、X = -115.124.5、Y = -35,994付近に存在し、平面形では円形に近く、径約0.25m、深さ約0.25mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径約0.1m、高さ約0.05m程度残存していた。樹種鑑定の結果、モミとされる。

SP52からは、瓦器椀、土師器小皿が出土した。21（第31-21図、図版16-21）の瓦器椀は、口縁部を丸く治め、下方にやや内湾気味に下る。口縁部と内面はヨコナデ、外面の口縁部から下はユビオサエの後ナデによって仕上げている。22（第31-22図、図版16-22）の土師器小皿は、底部はほぼ平らで、底部から口縁部にかけて外上方に伸びる。端部は丸い。

土坑7-3（第24図） 7区遺構密集地区の南東側X = -115.126、Y = -35,995付近を中心とする。南側は水田造成時に削平を受け欠失している。残存していた部分の形状は、平面形では「コ」字形に近い形を呈し、最大幅約2.6m、残存長約3.6m以上を測る。土坑の底面はほぼフラットで、検出面からの深さは地点で異なり、最大深さ0.25mを測る。土坑内から出土した遺物は、瓦器椀、土師器片、須恵器片などであるが、図化できるものはなかった。

土坑7-6（第24図） 7区遺構密集地区の南東側X = -115.126、Y = -35,995付近を中心とする。土坑の南側は、水田造成時に削平を受け欠失している。平面形では梢円形に近い形を呈していたものと推定される。長辺約6.8m、短辺3.3m以上を測る。土坑の底面はほぼフラットで、検出面からの深さ約0.35mを測る。

出土した遺物は、青磁碗（第31-25図、図版16-25）、瓦器椀（第31-26・27図、図版16-26・27）、土師器片、須恵器片などである。青磁碗（25）の口縁部はやや外側に開き、端部は丸い。口縁部から底部にかけてやや内湾気味に下る。

瓦器碗（26）の口縁部は短く上方に上がり丸く治め、口縁部から底部にかけて内弯気味に下る。27は端部を丸く仕上げ、口縁部から底部にかけてやや「く」の字形に下る。

溝7-1（第24図） 7区遺構密集地区の南西側X = -115.126、Y = -35.992.5付近から始まり、斜面に沿って下る。溝の南側は土坑7-6と切り合って存在する。新旧関係は、土層断面観察の結果、溝7-1が新しい。最大幅0.95m、最大深さ約0.65mを測る。

溝内から出土した遺物は、瓦器碗（第31-23・24図、図版14-23、16-24）、土師器片、須恵器片などである。23は、口縁部は短く上方に延び、口縁部から底部にかけてやや直線的に内側に下る。高台は貼り付け高台で断面三角形に近く短い。24は23と同様な形態であるが底部が欠損している。

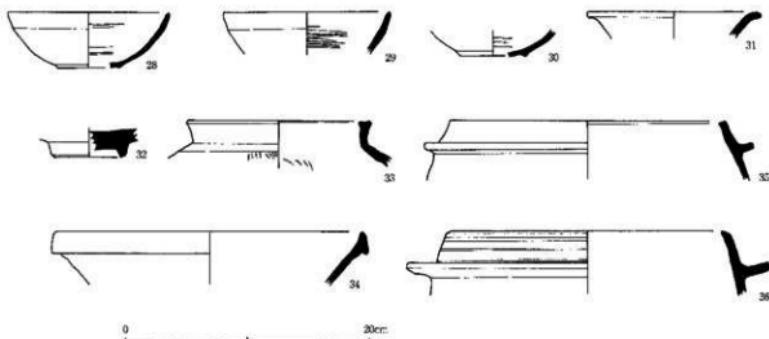
4. 遺構外出土遺物

7区から出土した遺物は、遺物包含層である灰黄褐色粘質土層および上層の灰黄褐色粘質土層から数多く出土した。出土した遺物は、岡化した遺物は少ないが、7区遺構密集地区およびその周辺に集中して出土した。

土器（第32図、図版16-28・29・36） 瓦器碗は、口縁から底部にかけてやや内弯気味に下るもの（28）と、口縁から底部にかけてやや内側に直線的に伸びるもの（29）がある。高台部については、29は欠損しているが、貼り付け高台で短い。いずれも時期はほぼ同時期のものと推定される。

31・32は青磁碗である。31は底部が欠損している。口縁は外側に大きく開き端部を丸く治める。口縁から底部にかけて斜めに直線的に下る。32は底部のみである。高台は削出し高台で、底部から垂直に下り、端部はやや角張る。

33は須恵器壺である。口縁部は肩部からほぼ垂直に延び、短い。口縁は角張る。回転ナデによって仕上げている。肩部から体部にかけて外側に斜めに延びる。外面は平行タタキ、内面は円形浮文によって仕上げている。



第32図 7区遺構外出土遺物1

34は須恵器擂鉢である。口縁はやや斜め上方に延び端部は丸く治める。口縁下部はやや垂れ下がり、丸く治める。口縁部から底部にかけて直線的に斜めに下る。

35・36は瓦器羽釜である。35は、鋸部はやや上方に延び角張る。鋸部から口縁部にかけて斜め上方に延び端部は角張る。36は、鋸部はやや上方に延び角張る。鋸部から口縁部にかけて斜め上方に延び端部は角張り、外面に3条の沈線を施す。

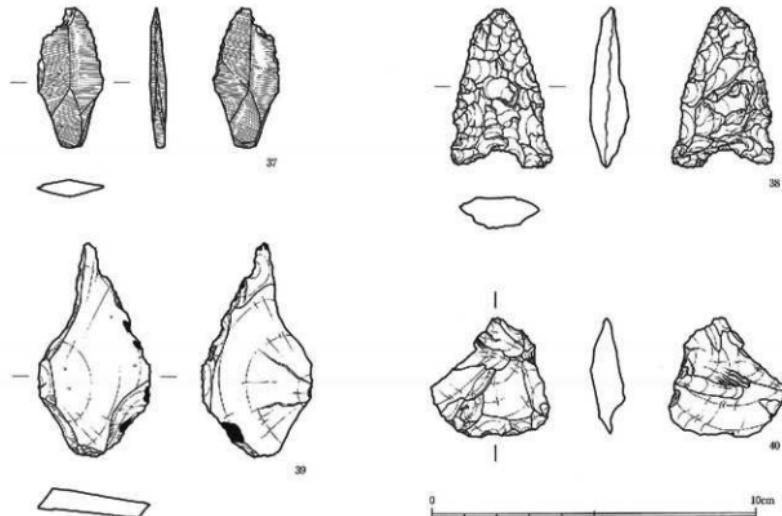
石器（第33図） 37（図版18-37）は磨製石鎌。先端部付近を欠失しているので現存長は43mmあるが、復元すると50mm程度になろう。最大幅20.5mm、厚さ5mm。横方向に丁寧に研磨している。

38（図版18-38）はいわゆるトロトロ石器。灰色から暗灰色のチャート製で、長さ48.5mm、最大幅31.0mm、最大厚は10.0mmだが、B面中央あたりに剥離が十分及ばず瘤状に残った部分がある。一部を欠く先端は鋭く尖るのではなく、丸みをもたせている。両側縁の下端付近がくびれ、また基部が大きく浅く抉れて、両側に踏ん張る脚部を作っている。A面中央付近は研磨されているか、あるいは摩滅していると思われる。大阪府下では、現在、箕面市新稻遺跡・箕面市栗生間谷遺跡・豊中市新免遺跡・枚方市穂谷遺跡・岸和田市栄ノ池遺跡で、計5点のトロトロ石器が知られているが、本例は新免遺跡の例に最も類似している。縄文時代早期前半に多い。

39（図版18-39）は典型的な翼状剥片。サスカイト製で、長さ66mm、幅34.5mm、厚さは6mm前後でほぼ均一。打面調整は顯著でない。下側の破損は古い時期のものと思われる。

40（図版18-40）は細部調整のあるサスカイト剥片。長さ36mm、幅36.5mm、厚さ10.5mm。旧石器時代のものであろう。

（註）関西縄文文化研究会『縄文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』2002



第33図 7区遺構外出土遺物2

第7節 8区の調査

1. 概要 (第35図、図版9-1)

8区は、中畠地区の西側、北の山塊から南に下る標高377m前後を測る丘陵縁辺部付近に存在する。調査区は、近世と推定される水田造成によって上下2段に分かれ、高低差は約1mを測る。

調査区の東側は、平成15年度に実施した遺跡確認調査の結果により埋積谷であることが確認されている。

8区で検出した遺構は、調査区上段の東側、東西約14m、南北約10mの狭い範囲に密集（第36図、図版9-2・3）し、残りの箇所においては一部を除き顯著な遺構は検出されなかった。

遺構が密集した地区で検出した遺構は、建物3棟、柵列1本、土坑2基、柱穴多数、溝などである。

2. 基本層序 (第34図、図版10-1・2)

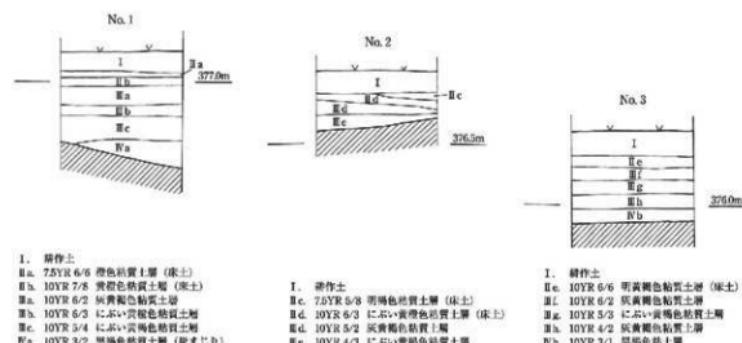
調査地区は、水田造成によって基本的に上段と下段に分かれているが、削平を受けなかった地区の層序は、ほぼ同様な堆積状況を示している。また、1区上段の一部においては、近代と推定される時期に、盛土を行い複数の棚田の一部を整地して1枚の水田とした箇所が、平面および断面で確認されている。

以下、各層の概要を記述する。

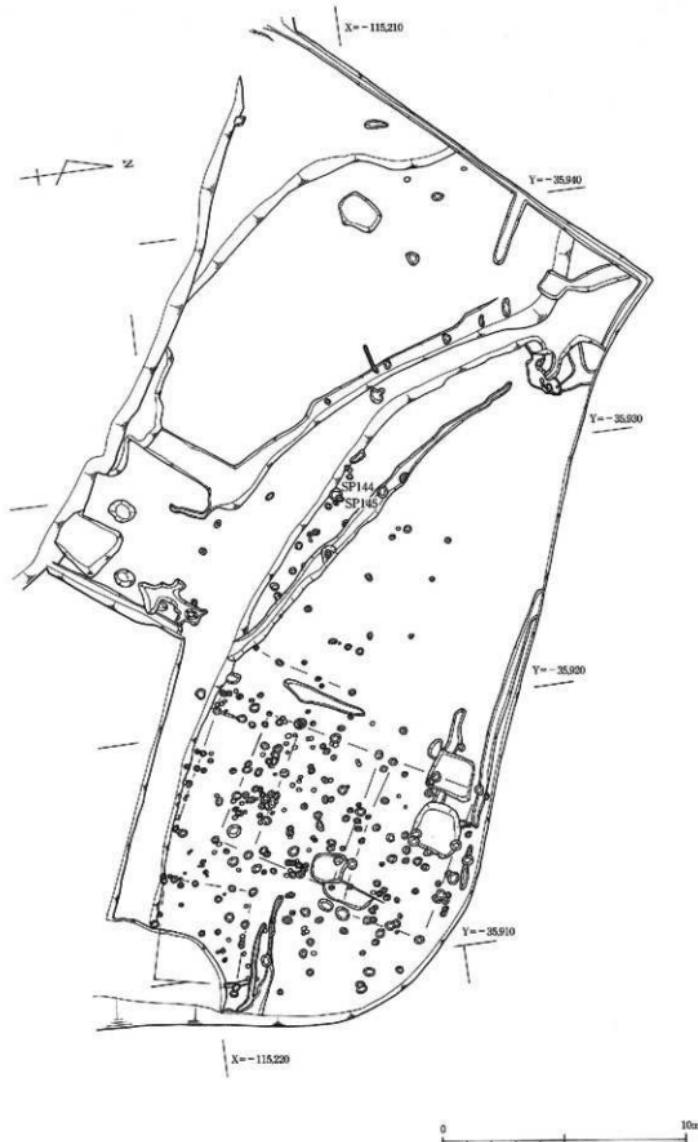
I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床土である。黄橙色粘質土ないしは明褐色粘質土を基本とする層で、部分的に2層に分けることができる。また地点によっては、存在しない箇所もある。層厚は、0.05mから0.1mを測る。

III層 にぶい黄褐色粘質土層および灰黃褐色粘質土層を基本とする。中世遺物を多く含むが、



第34図 8区基本層序図



第35図 8区平面図

近世の遺物も少量ながら混在している。層厚0.1mから0.2mを測る。層の堆積状況、色調、土質からみて、近世の時点において中世以前に堆積した層を耕作に利用するため、攪拌を受けたものと推定される。部分的に2層から3層に分けることが出来る。

IV層 本調査区の遺物包含層である。黒褐色粘質土ないしは粘土層を基本とする。基本断面位置が比較的状態の良い地点であるため、層厚が0.1mから0.2mと比較的厚いが、地点によっては、削平を受け存在しない地点もある。中世の遺物を含む。



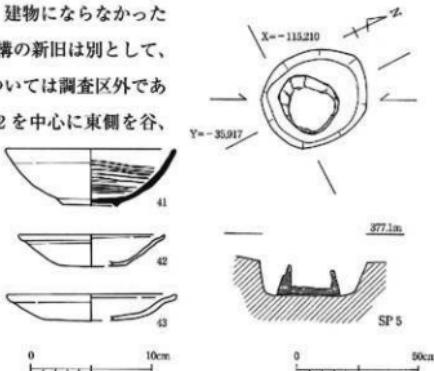
第36図 8区遺構密集地区平面図

3. 調査の成果

8区遺構密集地区（第36図、図版9-2・3） 8区の東側、 $X = -115.215$ 、 $Y = -35.915$ 付近を中心として、東西約14m、南北約13mの狭い範囲に検出された遺構群である。8区遺構密集地区は、建物3棟、柵列2本、土坑3基、建物にならなかった柱穴多数、溝などによって構成される。遺構の新旧は別として、遺構の配列状況から類推すると、北側については調査区外であるため不明な点が多いが、建物8-1・2を中心とし、南側を柵列8-2、西側については、柵列8-1によって区画されていたものと推定される。

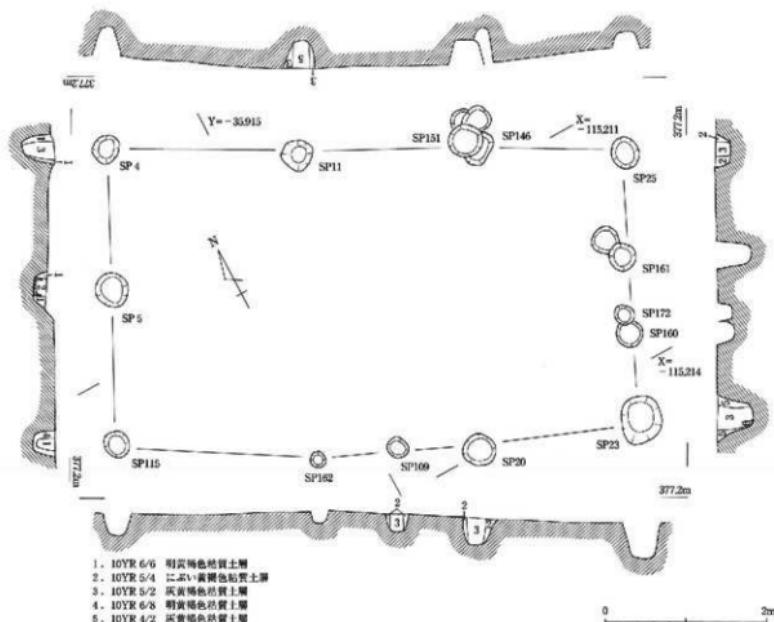
これらの配置状況から屋敷地であつた可能性が高い。

建物8-1（第39図、図版9-2・3、10-3～12） 8区遺構密集地区の北側、 $X = -115.214$ 、 $Y = -35.915$



第37図 建物8-1出土遺物
(41 SP160, 42 SP146, 43 SP11)

第38図 建物8-1
柱根検出状況図

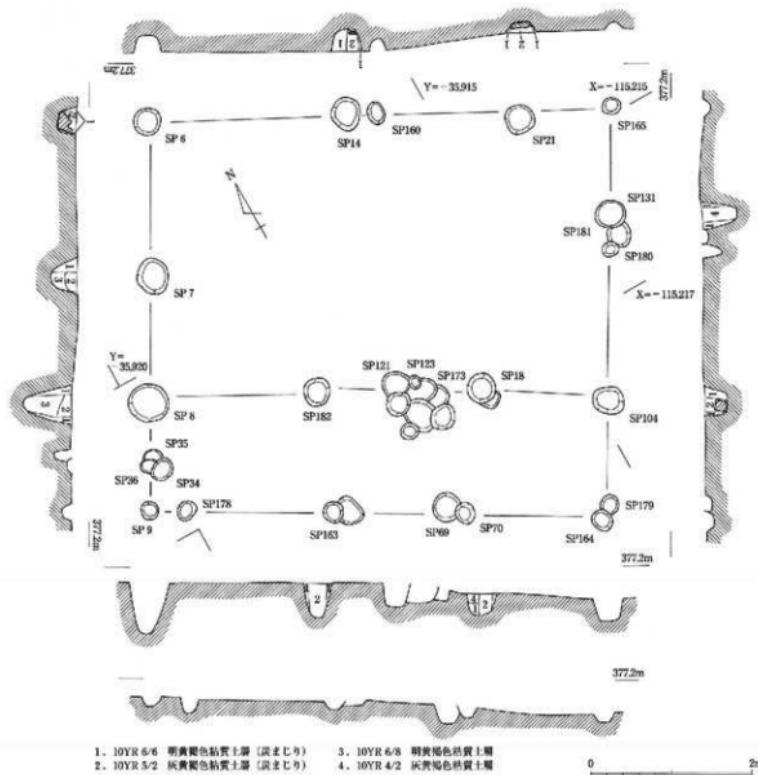


第39図 建物8-1平面・断面図

付近を中心には存在する。梁間 1 間（東側約3.3m、西側3.6m）、桁行き 3 間（北側約6.3m、南側約6.4m）と推定される建物である。しかし、南側の桁行きが、直線的に並ばないこと、東側の梁間の間隔が一定ではなく、柱穴が 2 本存在することから、建物であったかどうか疑問の点も残る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.45mを測る。柱穴の深さは、柱の長さが影響されている可能性があり、様々で深さ0.08mから0.2mを測る。

また、SP 5（第38図、図版10-3・4）の柱穴底部から柱根が検出された。柱根は径約0.27m、高さ約0.1m程度残存していた。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。

建物 8-1 より出土した遺物（第37図、図版14-41・43、16-42）は、SP11より土師器皿（43）、SP146より土師器皿（42）、SP160より瓦器椀（41）が出土している。41は、口縁は丸く治め内湾気味に底部に至る。高台は貼り付け高台で断面三角形に近く低い。42は、口縁部はやや外



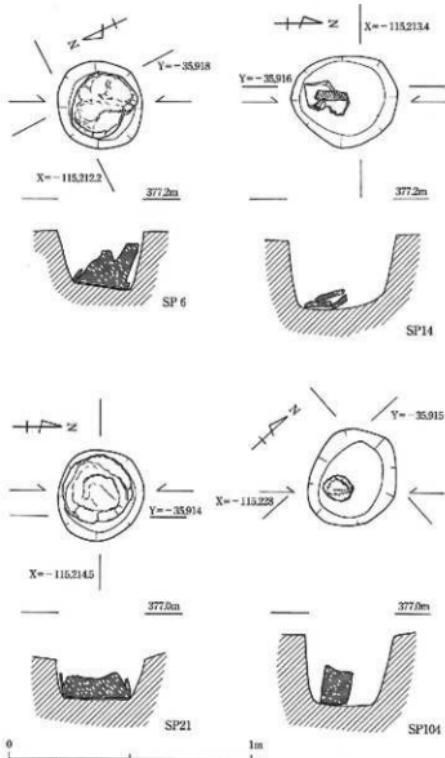
第40図 建物 8-2 平面・断面図

側に開き、口縁から底部にかけて斜めに下る。底部は平らに近い。43は、口縁部は外側に大きく開き、口縁部から内弯気味に底部に至る。底部は平らに近い。

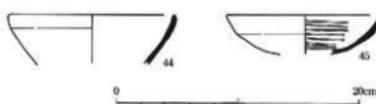
建物の時期は、柱穴内の遺物から13世紀前半のものと推定される。

建物8-2（第40図、図版9-2・3、11-1～8） 8区遺構密集地区の南側、X=-115.215、Y=-35.915付近を中心存在する。梁間1間（約3.5m）、桁行き3間（約5.6m）と推定される建物で、南側に庇が付く。梁間と庇の長さは1m前後を測る。柱穴は平面形では円形に近い形を呈し、径0.2mから0.5mを測る。柱穴の深さは、柱の長さが影響されている可能性があり、様々で深さ0.15mから0.65mを測る。

また、SP6、SP14、SP21、SP104の各柱穴底部から柱根が検出された。SP6（第41図、図版11-3）の柱根は、径0.25m、高さ0.18m程度残存していた。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。SP14（第41図、図版11-4）は、柱穴底部から根石とともに柱根が検出された。根石は、長さ約0.15m、幅約0.1m、厚さ約0.03mを測る。柱根は柱の中心部付近が残存していたものと推定され、形状は立方体に近い。長辺約0.15m、短辺約0.05m、厚さ0.1m前後を測る。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。SP21（第41図、図版11-5）の柱根は、径0.25m、高さ0.1m程度残存していた。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。SP104（第41図、図版11-1・2）の柱根は、中心部のみ残



第41図 建物8-2柱根検出状況図



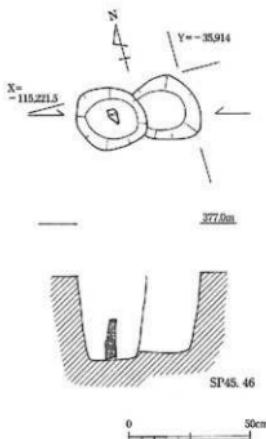
第42図 建物8-2・柵列8-1出土遺物
(44 建物8-2 SP69、45 柵列8-1 SP40)

存していたものと推定され、径0.11m、高さ0.14m程度を測る。樹種鑑定の結果、クリとされる。

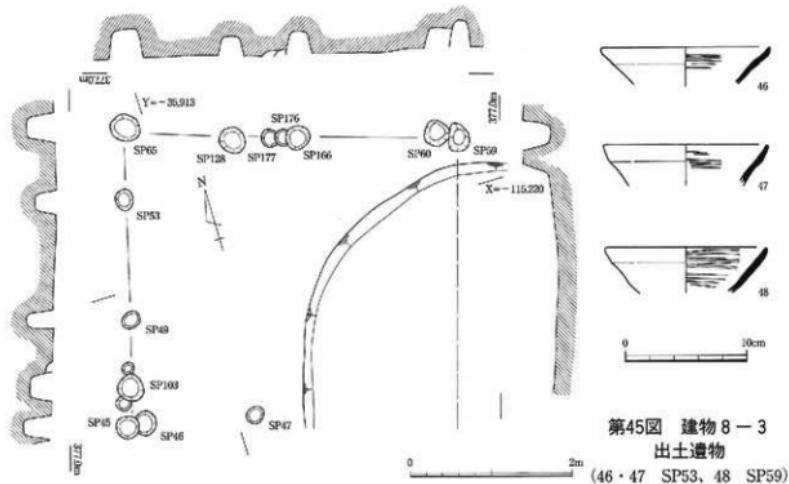
建物8-2から出土した遺物（第42図、図版16-44）は、瓦器椀がSP69から出土している。44は、口縁端部は丸く、口縁から底部にかけて斜めに直線的に下る。建物の時期は、柱穴内の遺物から13世紀前半のものと推定される。

建物8-3（第44図、図版9-2・3、11-9～12） 8
区遺構密集地区の南東側、X = -115.214、Y = -35.913付近
を中心に存在する。梁間2間（約4.1m）、桁行き3間以上
(約3.7m以上)と推定される建物である。建物の東側は、近世の搅乱、南側は、水田造成によって削平を受け失している。梁間の柱間は、2.0mから2.2m、桁行きの柱間は、0.9m
から1.3mを測る。柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、
径0.25mから0.4m、検出面からの柱穴の深さは、0.25mから
0.3mを測る。また、SP46（第43図、図版11-9）より柱穴
底部から柱根が検出された。柱の中心部付近が残存していた
ものと推定され、径約0.15m、高さ0.1m前後を測る。

建物8-3からは、SP53・59の各柱穴内より瓦器椀（第
45-46～48図、図版16-46・48）が出土した。46から48は、
口縁は上方にやや延び、端部は丸く治めている。口縁から底
部にかけて各土器とも角度は若干異なるが、直線的に内側に



第43図 建物8-3
柱根検出状況図



第44図 建物8-3平面・断面図

第45図 建物8-3
出土遺物

(46・47 SP53、48 SP59)

延びる。

建物の時期は、柱穴内の遺物から13世紀前半のものと推定される。

柵列 8-1 (第46図) 8区遺構密集地区の南西側 $X = -115.218$, $Y = -35.916$ から $X = -115.126$, $Y = -35.922$ 付近で検出した。全長約5.2mを測り、柱間は、1.4mから2.0m測る。柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径0.25mから0.35m、検出面からの柱穴の深さ0.15mから0.2mを測る。また、同軸線上には、SP39・167のように柱穴が並ぶものもあるが、深さおよび柱穴間の距離が接近していることから現在の所、柵列に含めないこととした。

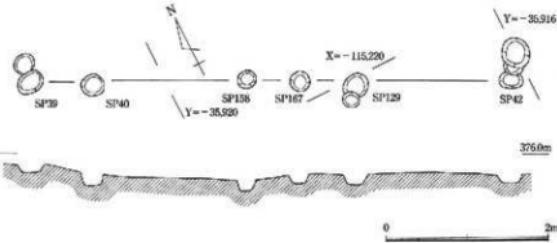
出土した遺物（第42図-45、図版16-45）は、瓦器碗がSP40から出土している。45は口縁部から底部にかけて内湾し、底部は欠損しているが、器高は低いものと推定される。柵列の時期は、柱穴内の遺物から13世紀前半のものと推定される。

柵列 8-2 (第47図) 8区遺構密集地区の南側 $X = -115.219$, $Y = -35.916$ から $X = -115.221$, $Y = -35.921$ 付近で検出した。全長約5.1mを測り、柱間は、1.3mから1.9m測る。柱穴は、平面形では円形に近い形を呈し、径0.25mから0.3m、検出面からの柱穴の深さ0.1mから0.27mを測る。また、同軸線上には、柱穴が並ぶものも認められるが、深さおよび柱穴間の距離が接近していることから現在の所、柵列に含めないこととした。

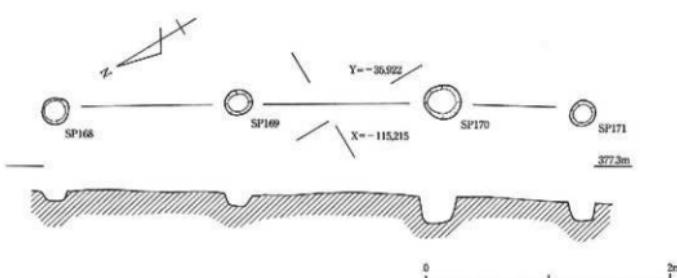
柵列の時期は、柱穴内からは団化できる遺物は出土しなかったが、遺構の配列状況から建物群に伴う遺構と推定されることから、13世紀前半のものと推定される。

柱穴（第36・49図）

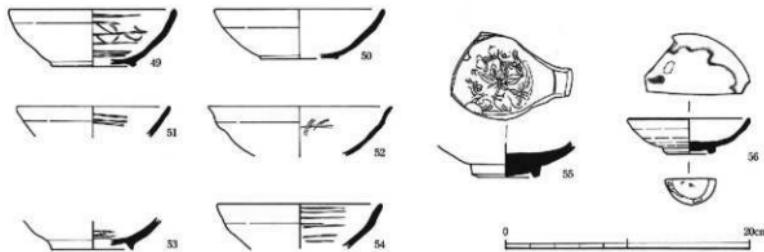
建物や柵列の一部と考えられる柱穴以外にも、8区遺構密集地区において多数の柱穴を検出した。これらにつ



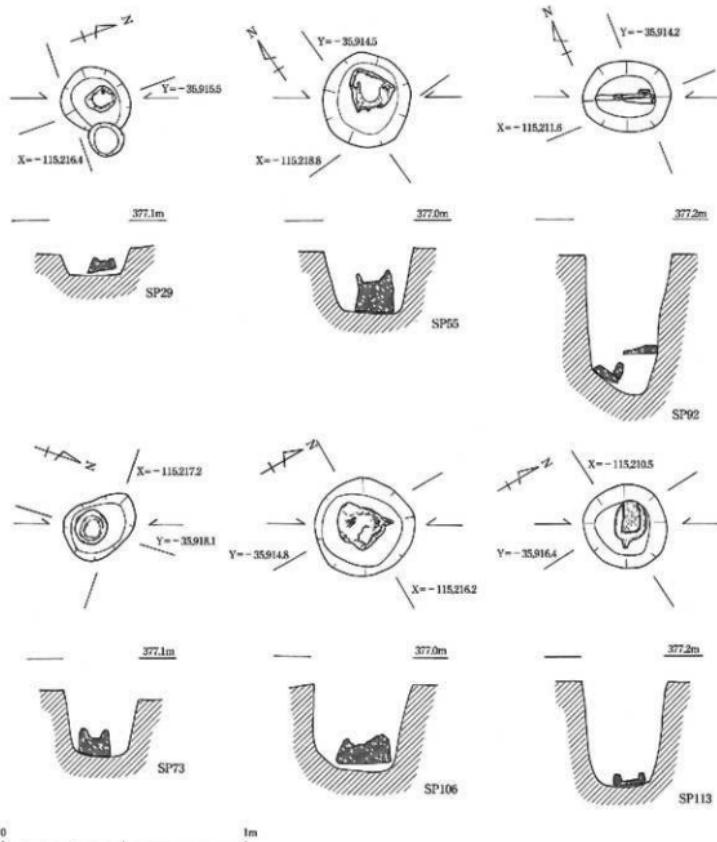
第46図 柵列 8-1 平面・断面図



第47図 柵列 8-2 平面・断面図



第48図 8区柱穴内出土遺物 (49 SP145、50・51 SP22、52 SP83、53 SP144、54 SP74、
55 SP87、56 SP148)



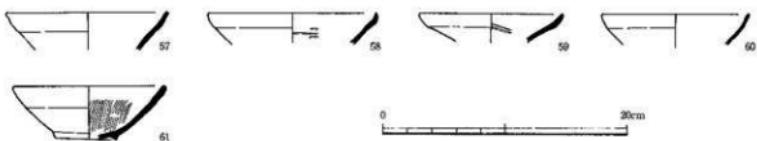
第49図 8区柱根検出状況図

いて、調査中、調査後にすべて検証したが、なんらかの並びを示すものも中には認められたが、建物、橋列など、複数の遺構でひとつの遺構を形成するものはなかった。

それらの中には、SP29・55・73・92・106・113（第49図、図版12-1・2・8-10）のように柱根ないしは、礎板が検出されたもの。SP22・74・83・87・144・145・148（第48図、図版14-49・50、15-56、16-52-55）のように図化できる遺物が、出土したものもある。

SP29は、 $X = -115,216.4$ 、 $Y = -35,915.5$ 付近に存在し、平面形では円形に近く、径約0.3m、深さ約0.1mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径約0.15m、高さ約0.06m程度残存していた。SP55は、 $X = -115,218.8$ 、 $Y = -35,914.5$ 付近に存在し、平面形では円形に近く、径約0.3m、深さ約0.27mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径0.15m、高さ0.17m程度残存していた。樹種鑑定の結果、カシワ、ミズナラ、コナラ等のコナラ節とされる。SP73は、 $X = -115,217.2$ 、 $Y = -35,990.1$ 付近に存在し、平面形では楕円形に近く、長径約0.3m、短径約0.22m、深さ約0.28mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径0.13m、高さ0.1m程度残存していた。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。SP92は、 $X = -115,211.6$ 、 $Y = -35,916.2$ 付近に存在し、平面形では円形に近く、径約0.35m、深さ約0.6mを測る。礎板と推定される板材は、柱穴内底部付近から3個出土し、長さ0.12m、幅0.05m程度、厚さ約0.03m前後を測る。樹種鑑定の結果、アカマツ、クロマツ等の二葉松類に属するものとされる。SP106は、 $X = -115,216.2$ 、 $Y = -35,914.8$ 付近に存在し、平面形では円形に近く、径0.4m前後、深さ約0.37mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径0.23m、高さ0.12m程度残存していた。樹種鑑定の結果、スタジイとされる。SP113は、 $X = -115,210.5$ 、 $Y = -35,916.4$ 付近に存在し、平面形では円形に近く、径約0.35m、深さ約0.42mを測る。柱根は、柱穴内底部から出土し、径0.14m、高さ0.05m程度残存していた。

SP145から出土した瓦器碗（49）（図版14-49）は、端部は丸く治め、口縁から底部にかけて内湾し、底部は平らに近い。高台は貼り付け高台で、断面三角形に近いが短い。SP22から出土した瓦器碗（50）（図版14-50）は、口縁端部が丸く、口縁から底部にかけて内湾し、高台は貼付け高台で、断面三角形に近く短い。器高は低い。51は、口縁端部は断面三角形に近く、口縁部から底部にかけて斜めに直線的に下る。SP83から出土した瓦器碗（52）（図版16-52）は、口縁部が体部端からやや外反し、口縁部から底部にかけて内湾気味に下る。SP144から出土した瓦器碗（53）（図版16-53）は底部のみ残存し、底部から体部にかけて内湾している。高台は貼り付け高台で、やや長く外側に延びる。SP74から出土した瓦器碗（54）（図版16-54）は、口縁部が体部



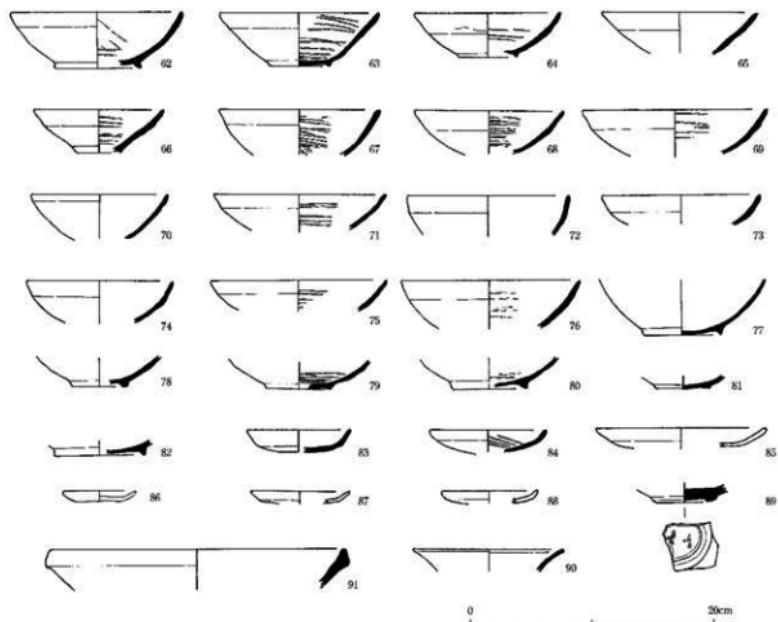
第50図 8区遺構内出土遺物（57・58・61 土坑8-3、59・60 土坑8-136）

端からやや外反し、口縁部から底部にかけて内側にやや直線的に下る。SP87から出土した青磁碗（55）（図版16-55）は、底部のみ残存し、内面底部に陰印刻草花文を施す。高台は、削出し高台である。SP148から出土した白磁皿（56）（図版15-56）は、口縁端部は丸く、口縁部から底部にかけて内弯し、底部は平らに近い。高台は削り出し高台である。内面の体部と底部の界には花弁が描かれている。白磁皿は、約2分の1が欠損しており、その断面の前面には黒漆と推定される黒褐色の付着物が認められる。このことから、皿が使用時に破損したため黒漆によって接合したものと推察される。また、高台内面には、赤色顔料による印が認められる。

溝8-1（第35図、図版9-1） 8区の南西側X = -115,205、Y = -35,933付近を始点とし南東方向に延び、X = -115,218、Y = -35,924付近で水田耕作時に削平され欠失している。溝は始点から徐々に、幅、深さとも大きくなり最大幅約0.8m、最大深さ約0.3mを測る。溝内からは全く遺物は出土しなかったが、埋土が柱穴内や他の遺構の色調、土質がほぼ同様なものであったため、ほぼ同時期のものと判断した。また、溝の南側には、柱穴が多数認められたため、溝の南側に存在していた可能性がある屋敷地と外部とを分ける溝であった可能性がある。

4. 遺構内出土遺物（第50図）

土坑8-3から出土した瓦器椀（57・58）は、口縁は上方にやや延び、端部は丸く治めている。



第51図 8区遺構外出土遺物

口縁から底部にかけて各土器とも角度は若干異なるが、直線的に内側に延びる。61（図版14-61）は、口縁端部は丸く、口縁から底部にかけて直線的に延びる。高台は、貼り付け高台で断面三角形に近く、短い。土坑8-136から出土した瓦器碗（59）は、口縁部と体部の界から外上方に延び、端部は丸い。口縁部から底部にかけて斜めに直線的に延びる。底部を欠損しているが、器高は低い。60は、口縁端部は丸く、口縁から底部にかけて内弯している。

5. 8区出土遺物（第51図、図版14-63、15-77・89、16-62・64、17-65-71・78・81・84-86）

8区の遺構以外から出土した遺物は、中世の遺物包含層上層に存在するにぶい黄褐色粘質土層および灰黄褐色粘質土層から数多く出土した。遺物包含層である黒褐色粘質土ないしは粘土層からは、少なかった。

瓦器碗（62-82）は、若干古い形式と推定される62-77・80を除くと、ほぼ同じ形式内に治まるものと考えられる。瓦器碗は大きく分けて2タイプ存在する。ひとつのタイプは、口縁から底部にかけて内弯するもので、これらは、62・64・67-70・72・73・74がそれにあたる。次のタイプは、口縁から底部にかけて斜めに直線的に下るもので、63・65・66・71がそれにあたる。これらの高台は、貼り付け高台で、断面三角形に近い形を呈し、短いものが多い。土器の表面が摩滅しているものを除き、内面の口縁部から底部にかけて、暗文を施している。これらの他に若干時期の遅るものとして、76・77・80がある。76は、底部が欠損しているが、口径が他のものより口径が若干大きく、口縁から底部にかけて内弯し、器高は高く、器壁も厚い。77は、体部から底部にかけて残存し、体部から底部にかけて内弯し、高台は貼り付け高台で、断面三角形に近い外側に張り出す。器高は高い。80は底部のみ残存し、形状は77と比較的似ている。

瓦器小皿（83-84）については、83は底部から斜め上方に延び、端部は丸い。底部は平らに近い。84は、底部から斜め上方に延びるが、83に比べ短い。底部は、口縁部と底部の界からやや丸みを持つ。

土師器皿（85）は、底部から口縁部にかけて斜め上方に延び、端部は丸みを持つ。底部は大部分が欠損しているが、残存部から平らに近い。

土師器小皿（86-88）は、口径、器高の若干の違いは認められるが、ほぼ同様な形態を示す。底部から口縁部にかけて外上方に直線的に延び、端部は丸みを持つ。底部は平らに近い。

89は白磁碗の底部である。底部は平らに近い。高台は削り出し高台で断面四角形に近い。高台内面に墨書が書かれている。高台径および字体の大きさから、2字あったものと推定されるが、上部に書かれていた文字は、文字の大部分が欠損しており読めない。下部に書かれている文字は「上」と読める。

90は、青磁の皿で底部は欠損している。底部から口縁部にかけて外反気味に延び端部は丸い。須恵器鉢（91）は、口縁部は断面三角形に近く、若干下に垂れ下る。口縁部から底部にかけて斜めに直線的に下る。

第8節 9・10区の調査

1. 概要 (第53図、図版13-1・2)

9・10区は、中畠地区の西側、北の山塊から南に下る標高377m前後を測る丘陵縁辺部付近に位置する。9区は、近世と推定される水田造成によって上下2段に分かれ、高低差は約2mを測る。10区は、9区の約2m東側に存在する調査区で、9区の上段と標高がほぼ同レベル上にある。

既存の調査区との関係は、西側を7区と接し、10区の東側約2m先には8区がある。

両調査区とも調査区の面積は異なるが、遺物は比較的多く出土し、上段に集中する。しかし、検出した遺構は、石の抜き取り跡と推定される小穴、木の根の痕跡、不定土坑などで、顕著な遺構は、溝、単独で存在する柱穴など極少数であった。このことから中世において、遺構群と遺構群の間の空白地帯といえる。しかし、出土した遺物の量からみて、屋敷跡などの遺構は、調査区北側の調査区外の丘陵縁辺部上部に存在する可能性がある。

2. 基本層序 (第52図、図版13-3・4)

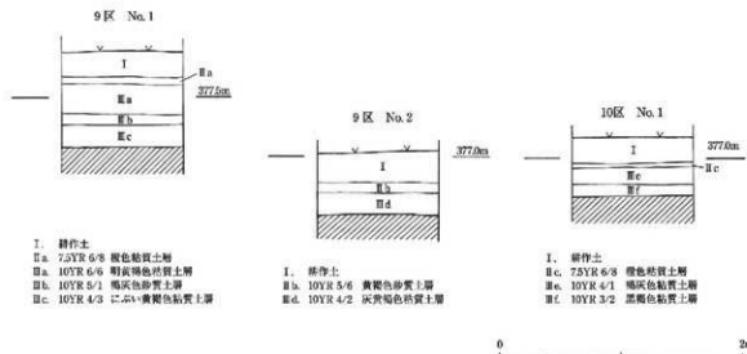
調査地区は、近世と推定される水田造成によって削平され、基本的に上段と下段に分かれている。しかし、削平を受けなかった地区の層序は、両地区ともほぼ同様な堆積状況を示している。

以下、各層の概要を記述する。

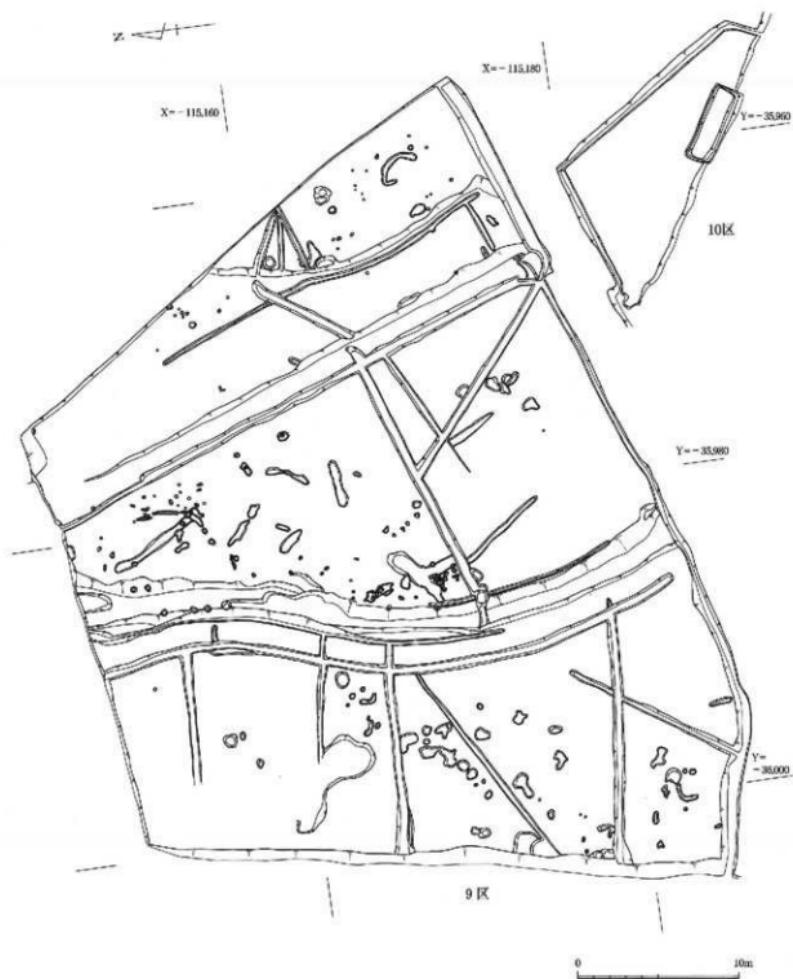
I層 現耕作土層で層厚は、0.2m前後を測る。

II層 現耕作土層の床土である。層厚は、0.05mから0.1mを測る。

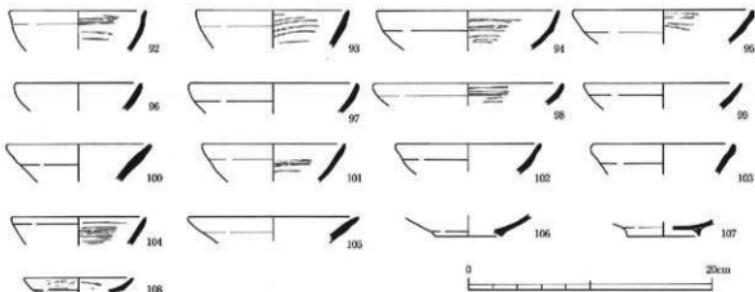
III層 調査地点によって、色調、土質とも若干異なるが、にぶい黄褐色粘質土層および灰黄褐色粘質土層を基本とする。中世遺物を多く含むが、近世の遺物も少量ながら混在している。層厚0.2mから0.5mを測る。層の堆積状況、色調、土質からみて、近世の時点において中世以前に堆積した層を耕作に利用するため、攪拌を受けたものと推定される。部分的に2層から3層に分けることが出来る。



第52図 9・10区基本層序図



第53図 9・10区平面図



第54図 9・10区遺構外出土遺物

3. 出土遺物（第54、55図、図版17-92～102・104～108、18-109）

9・10区から出土した遺物は、近世と推定されるにぶい黄褐色粘質土層および灰黃褐色粘質土層中より出土した。出土した遺物は、9区上段が最も多く、9区下段、10区と続く。出土した遺物は、中世の遺物が最も多く、図化はしなかつたが縄文時代と推定されるサスカイト、チャートの剥片が出土している。

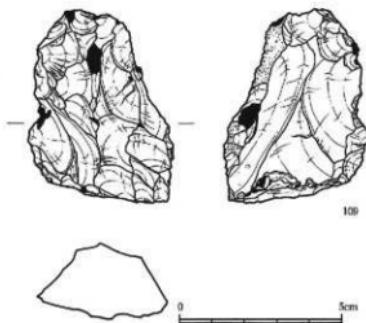
土器 瓦器椀（92～107）は、大きく分けて2タイプ存在する。ひとつのタイプは、口縁から底部にかけて内弯するもので、これらは、92・94・95・97・98・102がそれにあたる。次のタイプは、口縁から底部にかけて斜めに直線的に下るもので、93・96・99・100・101・103・104・105がそれにあたる。

口縁端部の形状は、丸みを持つものと断面三角形に近いものがある。丸みを持つものは、口縁から底部にかけて内弯するものが多い。断面三角形に近い形を呈するものは、口縁から底部にかけて直線的に下るものが多い。

底部付近が残存しているもの（106・107）を図化したのは少ないが、高台は貼り付け高台で、断面三角形に近い形を呈し、短いものが多い。

土器の表面は、摩滅しているものを除き、内面の口縁部から底部にかけて、暗文を施している。瓦器小皿（108）は、口縁端部は丸く、口縁から底部にかけてやや内弯し、底部は丸みを持つ。

石器 109は細部調整のあるサスカイト石核。一部に風化面を残している。長さ60.0mm、幅45.0mm、厚さ23mm。



第55図 10区出土遺物

第3章 まとめ

中畠を含めた周辺の田能、二料、杉生、出灰などのいくつかの山間小盆地によって構成された集落には、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歴史的文献が数多く残存し、これらの時代の研究をする上において重要な地位を占め、歴史的にみても著名な地域である。

しかし、埋蔵文化財については、以前に田能盆地において、高槻市教育委員会によって遺跡分布調査が行われ、田能北遺跡、田能南遺跡が発見された以外には、実態が不明な地域であった。しかし、これまで当該事業による過去4年間の発掘調査によって徐々にではあるが、遺跡の状況が明らかになっている。今回調査を行った中畠遺跡は、前年までの調査を実施した田能盆地の東側に位置する小盆地に立地する遺跡である。

今回の調査の結果、後期旧石器時代の翼状剥片、縄文時代早期においてはトロトロ石器、有舌尖頭器などの石器とともに、それらに伴うと推定される剥片も出土している。このことからこれらの時代にも人々がこの周辺で生活していたことが明らかになった。それらに伴う遺構は削平されたものと推定され、全く検出されていないが、一定期間居住していた可能性が高い。田能地区の調査では、縄文時代と推定される遺物は極めて少なく、田能城跡において石器が出土した以外は、これらの時代のものは出土していない。

これらのことから、中畠地区は田能地区に比べ、この時代には生活するのに十分な条件を備えていたものと推察される。

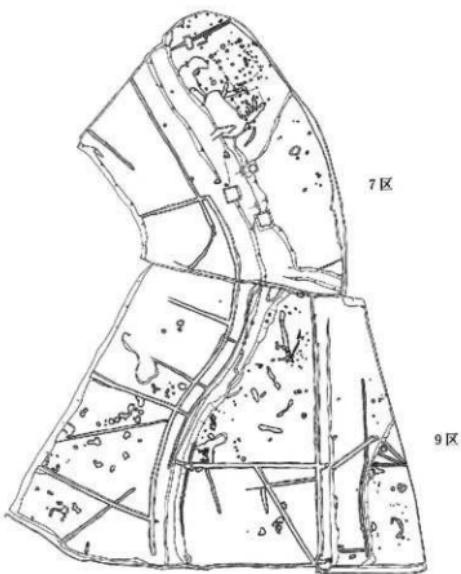
また、弥生時代中期とされる磨製石器が7区から1点出土している。これ以外にはその時代に伴う遺構、遺物を全く検出していない。このことから定住はしていないものの、狩などを行うための生活範囲の場所であったものと推定される。

中世の遺構は、2区、5区、7区、8区で検出している。これらの中で最も広範囲に発掘調査を実施した中畠西地区の遺構配置（第56図）からみた集落の状況について記したい。

中畠西地区は、北の山塊から南に下る標高377m前後を測る丘陵縁辺部付近に存在する。調査地区は、7区が西端、8区が東端に位置し、その中央付近に9、10区がある。遺構は、屋敷地と推定される遺構群が7区、8区の一部の区域のみで確認した。しかし、同一調査区内の別の区域、同じ丘陵縁辺部中央付近に存在する9、10区においては、遺物は比較的多く出土するものの、顕著な遺構は全く検出されなかったこと。また、水田造成時に遺構面が削平を受けた箇所は、調査の結果一部に限られていたことなどから、遺構の空白地帯であったものと推定される。

屋敷地の遺構配置の状況は、母屋と推定される規模の大きな建物と、1棟ないしは2棟の作業小屋ないしは物置小屋と推定される小規模な建物で構成される。これらの建物は、柱穴の配列状況からの最低2回以上の建て替えを行っているものと推定される。そしてその建物群の周囲を、檻ないしは、溝、土坑などによって取り囲んでいる。

遺構密集地区の規模は、一部が調査区外に存在するものの、7区の面積は約150m²、8区の面



7区

9区

10区



8区



第56図 7～10区遺構平面図

積は、約182m²を測り、建物の数、規模とも8区の屋敷地の方が大きく、地区内での階層差を表しているものと推察される。

屋敷地の時期は、出土遺物からいざれも13世紀前半代と推定され、共存していた可能性が十分にある。

のことから、中世における現風景は、散村といった状況を醸し出し、家の軒数、屋敷地の位置は若干異なるものの、現在の集落の在り方と殆ど変わりないといえる。

また、現在の所、中畠地区の西側に存在する発掘調査によって田能盆地内で検出した遺構、遺物は、奈良末から平安初期を上限とし、13世紀前半代に至る遺構・遺物が数多く検出されている。これらのことから、田能盆地の開発は、奈良時代末から平安初期にかけて始まったと想定している。しかし、盆地の規模では、田能盆地に劣る中畠盆地内に存在する中畠遺跡においては、遺構、遺物の大半は、13世紀前半代中心として検出している。これらの中には若干遡る可能性のある遺物も出土しているが、遡っても平安時代末までである。

これらのことから調査予定面積の約半分の結果からではあるが、中畠地区においては、現在の所、13世紀前半以降に開発が進んだことを示している。これらの開発時期の違いは、盆地の面積の違い、交通の要所、標高差から来るものであろうか。

これらの調査成果は、この周辺地域の歴史を考える上で、また北摂山地の開発の状況を知るうえで貴重な資料を提供したものといえる。中畠遺跡の発掘調査は、引き続き来年度にも実施する予定であり、今年度の調査成果を合わせて山間小盆地における遺跡の状況が、より明らかになるであろう。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかはたいせきはくつちょうさがいよう
書名	中畠遺跡発掘調査概要
副書名	府営農地還元資源利活用事業「桜田地区」の調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奥 和之
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	面積 (m ²)	調査原因			
		市町村	遺跡番号								
なかはたいせき 中畠遺跡	たかつきしおおあざ 高槻市大字 なかはた 中畠地内	27207	135	34° 57' 39"	135° 36' 22"	2003年6月～ 2004年3月	4,881	農地還元資源 利活用事業 「桜田地区」			
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項				
中畠遺跡	散布地		後期旧石器時代	翼状剥片		須恵器 瓦器 土師器 青磁 白磁					
	散布地		縄文時代早期	トロトロ石器							
	集落跡	中世	建物 柵列 溝 土坑 道状遺構	道状遺構							

中畠遺跡発掘調査概要	
—府営農地還元資源利活用事業「桜田地区」の調査—	
発行	大阪府教育委員会
	〒540-8571
	大阪市中央区大手前2丁目
	Tel. 06-6941-0351
発行日	2004年3月31日
印刷	株式会社 中島弘文堂印刷所
	大阪市東成区深江南2-6-8
	Tel. 06-6976-8761

図 版



中畑地区全景（西上空より）

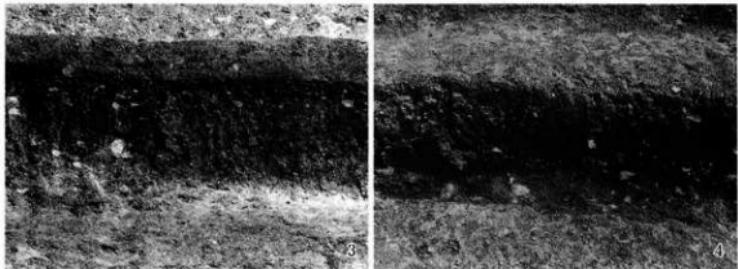
1. 調査地区全景
(南上空より)



2. 1区全景 (南より)



3. 1区基本断面 1
4. 1区基本断面 2





1. 3区全景（東より）



2. 3区全景（南より）



3. 3区基本断面



1. 土坑 1 - 2 (南より)



2. 土坑 1 - 2 断面
(北より)



3. 道状遺構 1 断面 1



4. 道状遺構 1 断面 2
5. 2 区基本断面 (西より)

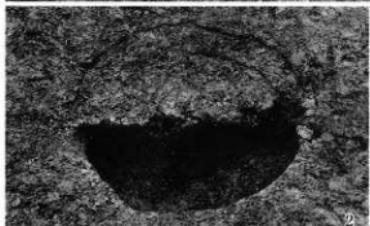


6. 2 区全景 (東より)

1. 建物3-1・横列3-1
(南より)

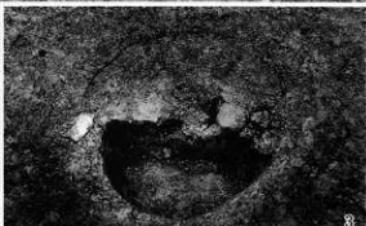


2. 建物3-1 SP17断面

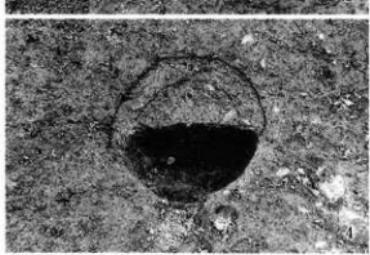


2

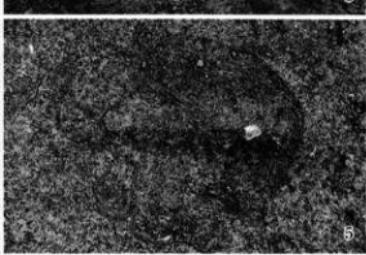
3. 建物3-1 SP16断面



3



4

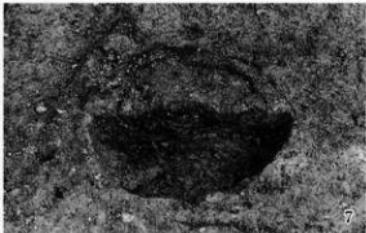


5

6. 建物3-1 SP18断面



6

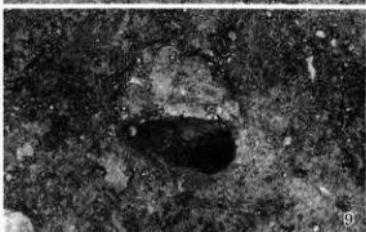


7

8. 建物3-1 SP22断面



8



9



1. 4区全景（北より）



2. 6区全景（北より）



3. 4区基本断面（南より）

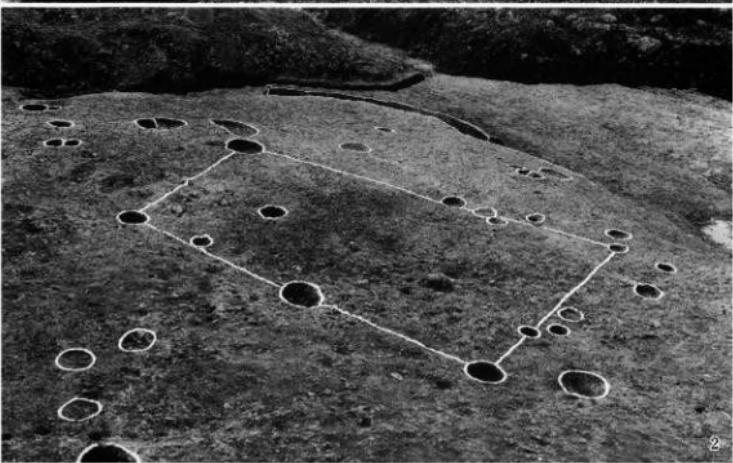


4. 6区基本断面（北より）

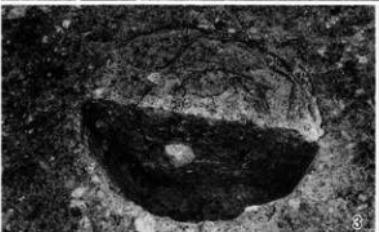
図版6



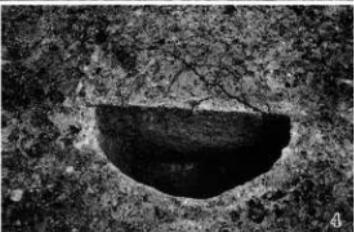
1. 5区全景（東より）



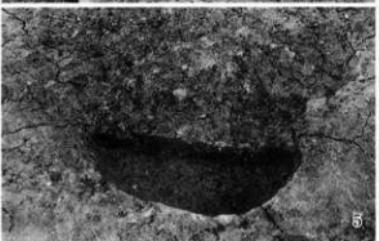
2. 建物5-1（東より）



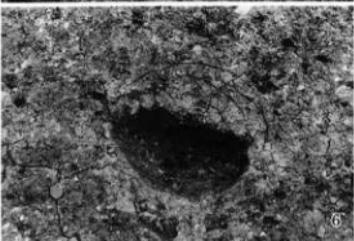
3. 建物5-1 SP 9断面



4. 建物5-1 SP 7断面



5. 建物5-1 SP 4断面



6. 建物5-1 SP 6断面

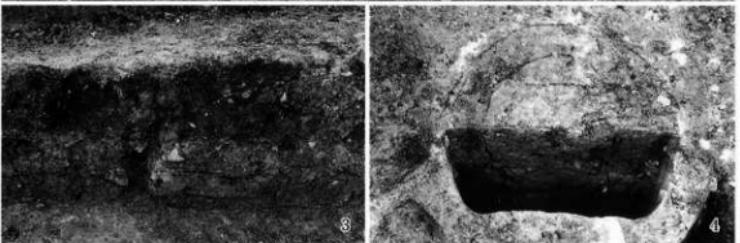
図版7



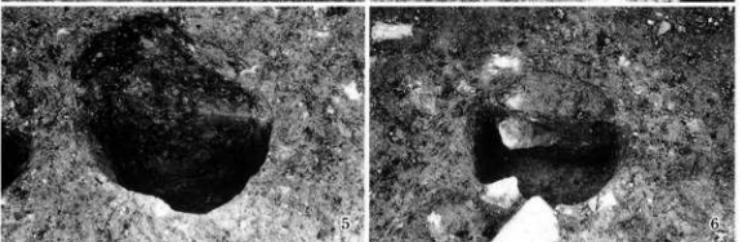
1. 7区全景(東より)



2. 7区造構密集地区
(南より)

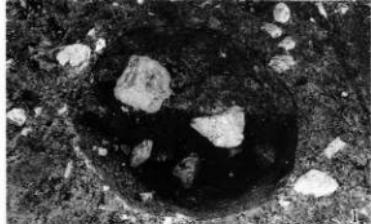


3. 7区基本断面(西より)
4. 建物7-1 SP10断面



5. 建物7-1 SP12断面
6. 建物7-1 SP16断面

1. 建物 7-1 SP8断面
2. 建物 7-1 SP20断面



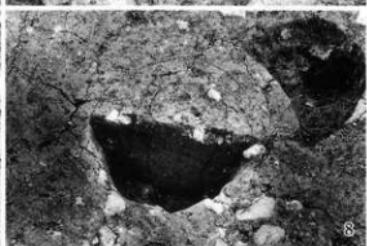
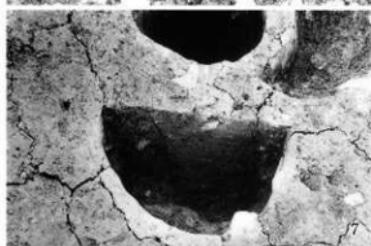
3. 建物 7-1 SP7断面
4. 建物 7-1 SP26断面



5. 建物 7-1 SP25断面
6. 建物 7-1 SP23断面



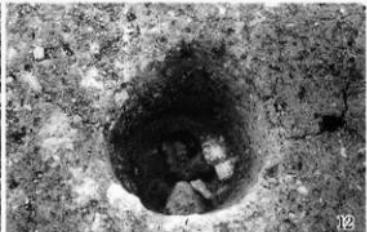
7. 建物 7-2 SP46断面
8. 建物 7-2 SP45断面

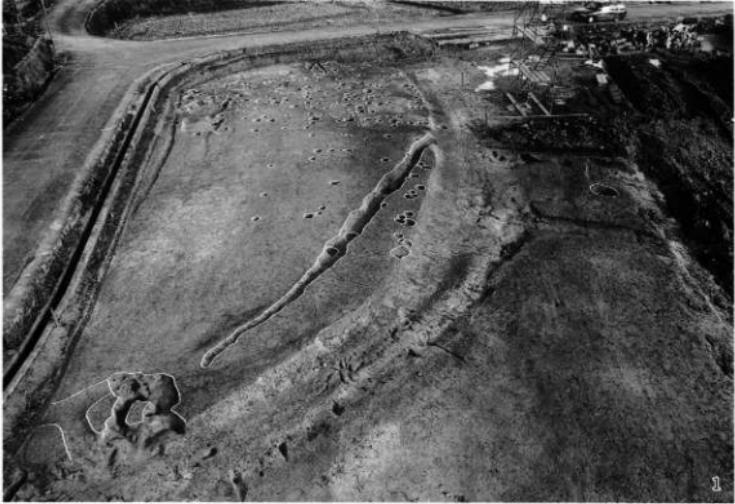


9. 建物 7-2 SP39断面
10. 建物 7-2 SP49断面



11. 建物 7-2 SP48断面
12. SP18柱根検出状況





1. 8区全景（西より）



2. 8区造構密集地区
(西より)



3. 8区造構密集地区
(南より)

1. 8区基本断面1

(西より)

2. 8区基本断面2

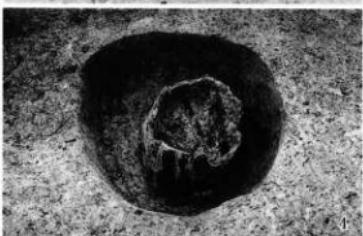
(東より)



3. 建物8-1 SP5断面

4. 建物8-1

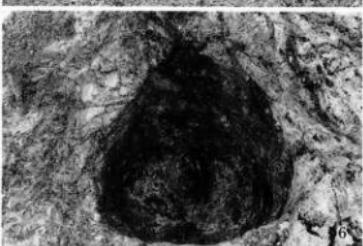
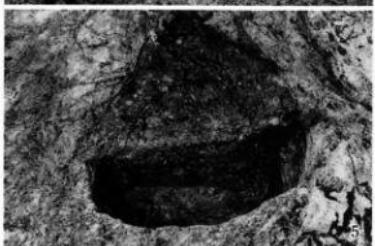
SP5柱根検出状況



5. 建物8-1 SP11断面

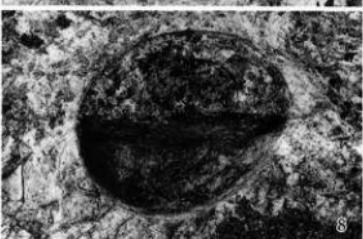
6. 建物8-1

SP11柱根検出状況



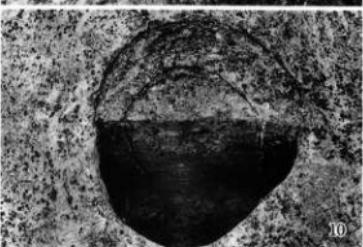
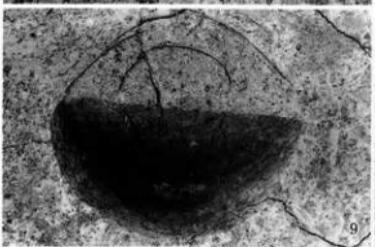
7. 建物8-1 SP4断面

8. 建物8-1 SP25断面



9. 建物8-1 SP115断面

10. 建物8-1 SP109断面

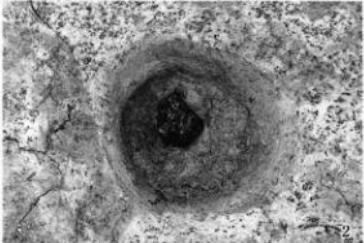


11. 建物8-1 SP20断面

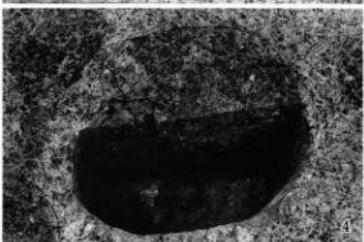
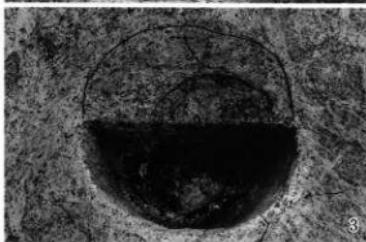
12. 建物8-1 SP23断面



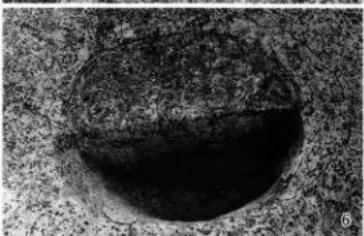
1. 建物 8 - 2 SP104断面
2. 建物 8 - 2
SP104柱根検出状況



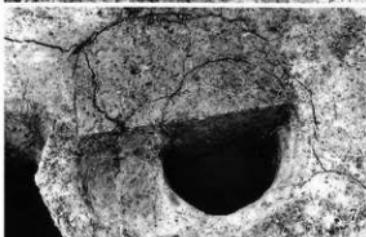
3. 建物 8 - 2 SP 6 断面
4. 建物 8 - 2 SP14断面



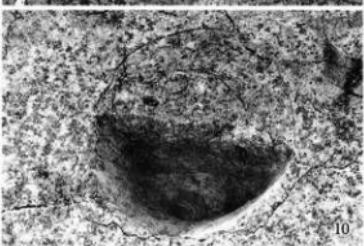
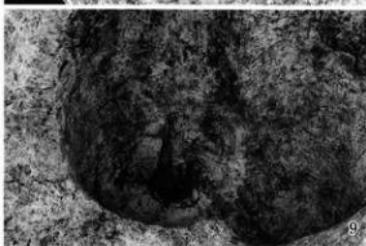
5. 建物 8 - 2 SP21断面
6. 建物 8 - 2 SP 7 断面



7. 建物 8 - 2 SP131断面
8. 建物 8 - 2 SP 8 断面



9. 建物 8 - 3
SP45柱根検出状況
10. 建物 8 - 3 SP10断面

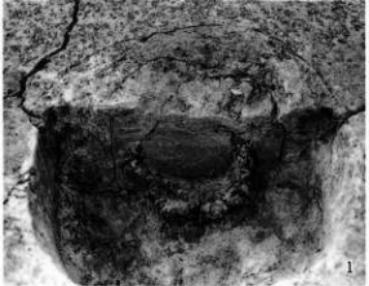


11. 建物 8 - 3
SP103断面
12. 建物 8 - 3
SP148断面

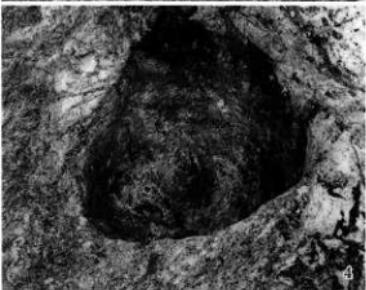
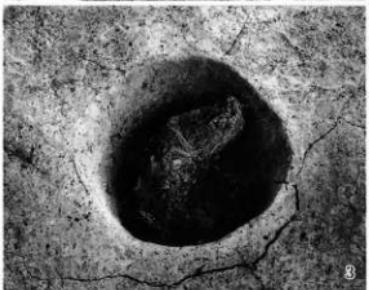


図版12

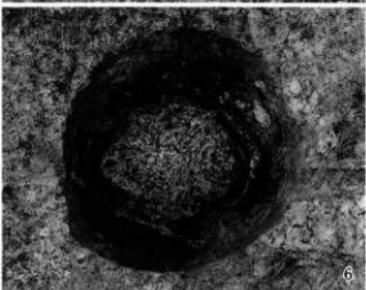
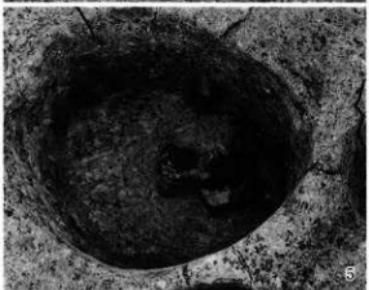
1. SP55断面
2. SP55柱根検出状況



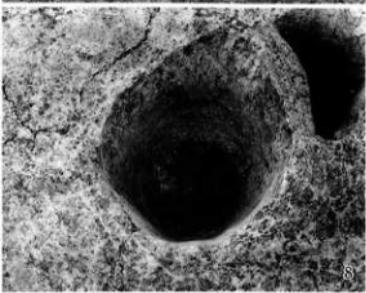
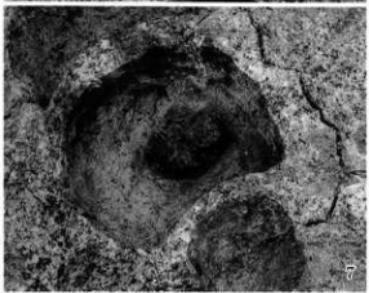
3. SP 6 柱根検出状況
4. SP11柱根検出状況



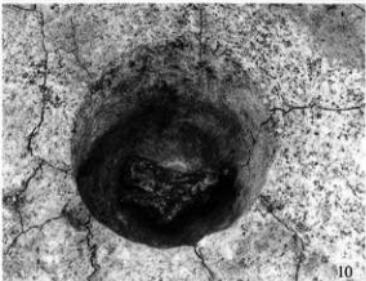
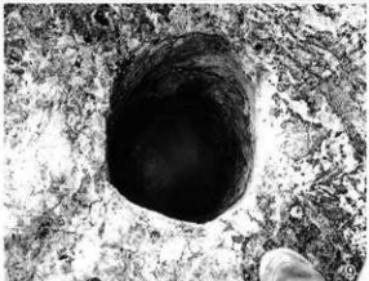
5. SP14柱根検出状況
6. SP21柱根検出状況



7. SP29柱根検出状況
8. SP73柱根検出状況



9. SP92柱根検出状況
10. SP106柱根検出状況





1. 9区全景（南東より）



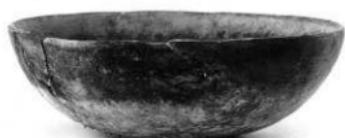
2. 9区全景（東より）



3. 9区基本断面 1



4. 9区基本断面 2



13



15



19



23



41



43



49



50



61



63



77



89



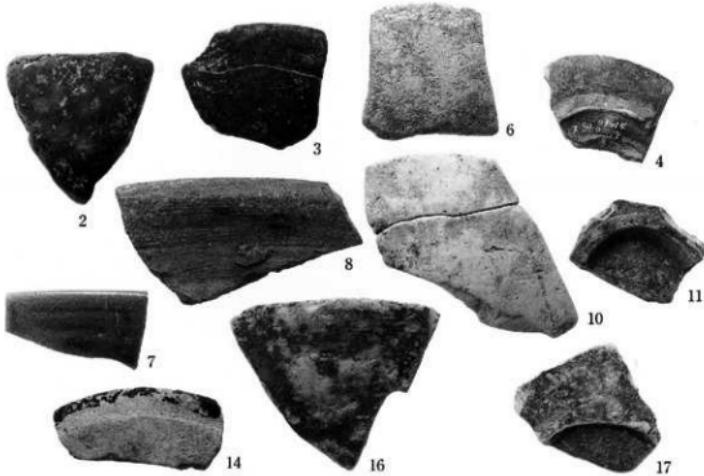
56-1

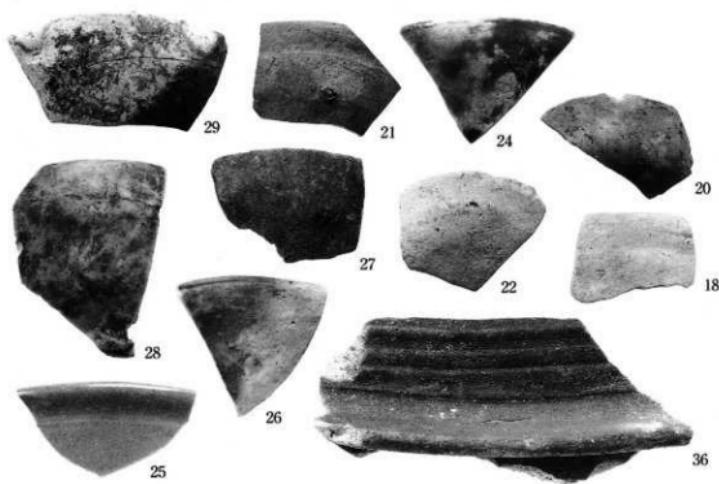


56-2

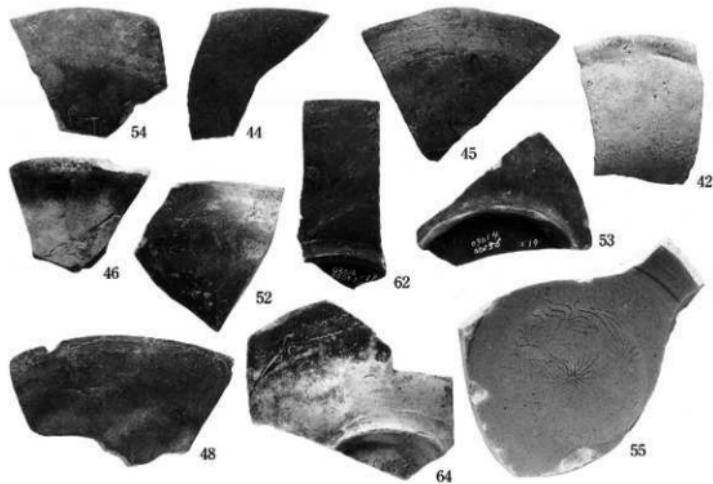


56-3

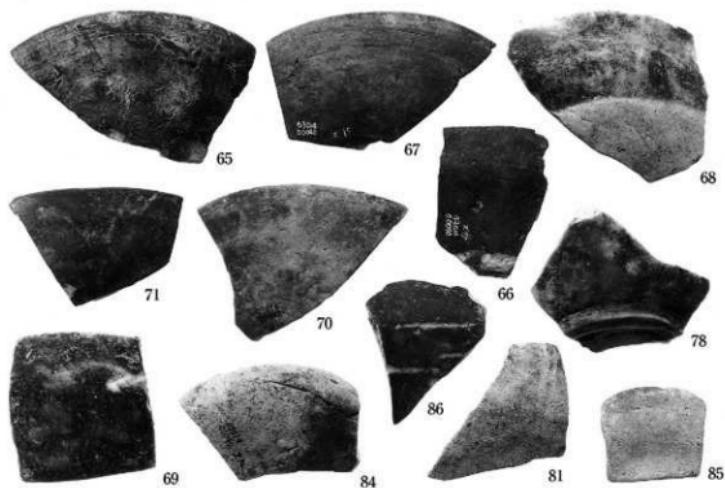




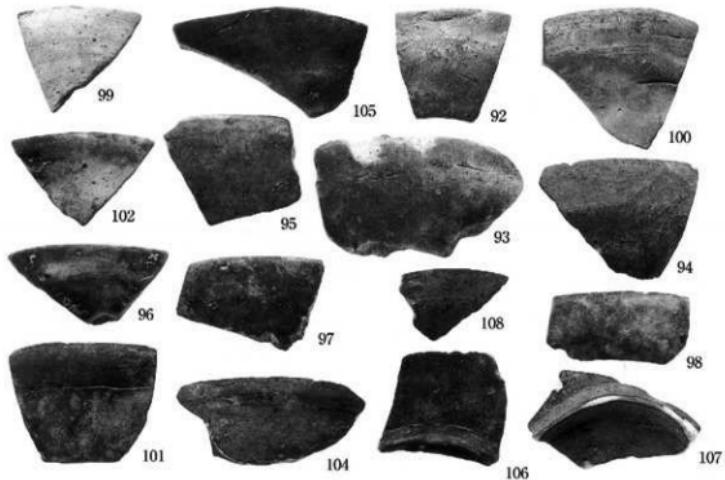
7区



8区-1



8区-2



9区



1



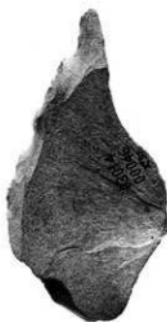
12



38



37



39



40



109

